

『相伝義書』相伝家の聖教目録について

庄司 暁憲

第一章 相伝家の聖教目録の概略

第一節 『相伝義書』の聖教目録

現在、『相伝義書』の書物類の中に聖教目録（典籍集）が、七、八冊程ある。所で、相伝家として最古の聖教目録は、願得寺実悟撰の『聖教目録聞書』一卷がある。しかし、この聖教目録は、城端別院の善徳寺に収蔵されたまま、後の相伝家に伝承されないうたようで、『相伝義書』の中に含めるかどうか今後の検討の余地を残している。次に、相伝家の聖教目録として挙げねばならないのが、性応寺了尊の聖教蒐集とその息子一雄侍従の『真宗正依典籍集』一卷とである。了尊は、明らかに相伝家の一人であることは、諸文献によって立証することが出来る。性応寺がいつ頃より相伝家寺院となったのか詳しくは分からないが、『性応寺

系図』によれば、

元和四戊午霜月廿一日、御一家に加え召さる。

とあり、恐らく了尊の宗学、信仰の優秀なるによって、つまり相伝の器量のあるによって、元和四年（一六一八）の時に相伝家寺院の一つに加えられたとも見做される。しかし、息子一雄の若死によって、その後相伝家寺院より没落していったものと推測されるのである。いまだ、了尊一雄父子の相伝家としての調査が行なわれていないので、憶測の域を出ないのであるが、一雄も父了尊より相伝を授与され相伝家の一人であったとも考えられる。

さて、了尊の聖教蒐集は、一冊の聖教目録として著わされることなく、その任を息子一雄に託したようである。この一雄の『真宗正依典籍集』は、現在『相伝義書』の聖教目録類の中に入っていないが、後の相伝家にとって、この一雄の聖教目録は、多大な影響を与える結果ともなったものであるから、是非とも『相伝義書』の聖教目録類に加えるべきであ

と思う。

そして、この一雄の後、相伝家の聖教目録は、光善寺寂玄の『典籍集全』一卷（『相伝義書』）が出現することになる。これは、一雄の『真宗正依典籍集』を元にして執筆されたものである。更に寂玄の息子一玄は、『浄典目録全』一卷を撰述して、寂玄の聖教目録に増補を加え、整理して、真宗の聖教類の全てをそこに掲載したのである。次いで一玄の息子真玄は、父祖の志しを承けて、『真宗依典籍』一卷、及び『浄土真宗依典籍私考 本・末・補記』の三巻を撰述して、相伝家、即ち浄土真宗の聖教目録の完成を成し遂げたのである。この真玄の相伝家聖教目録の完成によって、浄土真宗の聖教（典籍）が初めて明確にされたのである。その意味からは、相伝家の聖教目録における功績は言うに及ばず、真宗の聖教目録編纂史の上からも、真玄のこの業績は見逃がすことが出来ないものである。

この真玄の後を承けて、真宗寺真覚は、『浄土真宗依典籍目録 勘考 上・下』二巻を著わし、真玄の聖教目録の立場を更に徹底させたのである。そして、真覚の息子真昭は、真玄・真覚の聖教目録を相承して、『安永勘進』の付録（第二）に、『当流聖教目録之事』と題して、真玄の『真宗依典籍』一卷をそのまま転載しているのである。（よって真玄の『真宗依典籍』は、刊行の『安永勘進』を参照されし。）

以上が、相伝家の聖教目録類の概略であり、その中には、『相伝義書』に含まれている聖教目録（寂玄以下のもの）もあれば、そうでないもの

もある。そこで、一応上記に挙げた相伝家の聖教目録の一覧を左記に年代順に掲げておこう。

相伝家の聖教目録	一覽
実悟	『聖教目録聞書』
一巻	
（了尊）	『聖教蒐集』
一雄	『真宗正依典籍集』
一巻	
寂玄	『典籍集全』
一巻	
一玄	『浄典目録 全』
一巻	
真玄	『真宗依典籍』
一巻	
	『浄土真宗依典籍私考 本末・補記』
	三巻
真覚	『浄土真宗依典籍目録 勘考上・下』
二巻	
真昭	『当流聖教目録之事』
（一巻）	

第二節 相伝家の聖教目録の完成

『相伝義書』の聖教目録類の中で、特に注目を要するものは、光善寺第十一世円乘院真玄性顕（一七〇九～一七五二、四十四歳没）が著わした聖教目録の四巻である。即ち、

真玄の聖教目録	四巻
一、『真宗依典籍』	一巻
（内題）「浄土真宗正依聖教」	
	撰号

(内題)「浄土真宗傍依典籍」

二、『浄土真宗依典籍私考 本』

一卷 釈真玄

三、『浄土真宗依典籍私考 末』

一卷 釈真玄

(内題)「浄土真宗傍依典籍」

四、『浄土真宗依典籍私考 補記』

一卷 釈真玄

この真玄の労作である聖教目録四巻をもって、真宗『相伝義書』、つまり浄土真宗の相承教学の聖教が、明確に定められたのである。それは、真宗の聖教目録が、存覚師の『浄典目録』に始まって、実悟、一雄、寂玄、一玄と相伝家たちの聖教目録への試考がなされ、また更には、空恵『聖教目録』、知空『真宗録外聖教目録』、恵空『仮名聖教目録』、慈航『高宮聖教目録』、月笠『月笠聖教目録』、先啓『浄土真宗聖教目録』などの東西本願寺の学林・学寮の人々の模索があつて、ここ真玄に至って浄土真宗の聖教目録が完成されたのである。ただこの完成は、相伝家にのみ伝承され、宗学者たちからは無視されていたものと推測されるのである。

そして、相伝家の聖教目録においては、この真玄の聖教目録四巻をもつて次第相承されていくことになるのである。真玄以降の相伝家の人々は、次のとき人たちである。

真宗寺真覚(超芸)・真昭(超尊)・乗尊(遍舎)、教行寺真芸(性琇)、本宗寺真詮(超弘)・乗通(遍界)・乗留、慈敬寺遍照(乘恵)・乗賢(遍海)、本泉寺遍俊(乘恵)、専光寺乘覚(康憲)、南浜寺

真順(信順)・淳心(恵閑)、善照寺了義、願証寺真高(性榮)・乗道(遍尊)等。

これら相伝教学を伝持する者において、真宗の聖教の正依・傍依の選別は、真玄の聖教目録四巻を指南の書として捉え、そして正依・傍依の聖教の明らかなる上において浄土真宗を修学することになったのである。さて、この真玄の聖教目録四巻の著述年時については、いまだ不詳ながら、ただ『浄土真宗依典籍私考 補記』の末尾に、

右、報化会通、任御尋、延享元辰 霜月差シ上ル

との朱筆の添書きが加えられており、これは本文完成の後、再度、本文に註釈を施す中で、その本文の最後段に書き添えられたものである。

ここに、年号として「延享元辰」とあるが、実は、「延享元年」の干支は「辰」ではなく「甲子」である。逆に、「延享元辰」の元号の錯誤によるものなれば、それは恐らく「寛延」となる。即ち、「寛延元年戊辰」のことである。このどちらかの年時、延享元年(一七四四)～寛延元年(一七四八)に、『浄土真宗依典籍私考 補記』の中にある「報化会通」の文を、東本願寺第十八世従如上人に差し上げたことを、後より記憶を繙き書き添えたのである。敢てどちらの年時を採るかというならば、従如上人の御返伝の役は父一玄であり、延享二年(一七四五)五月二十八日に一玄より従如上人へ相伝が行われて、その翌三年(一七四六)一玄が六十四歳で没している。それ故、父一玄の後を承けて、真玄が従如上人の御返伝役を勤めたと見れば、「寛延元年戊辰」の方が自然な感じが

する。

しかし、右の年号が、直接にこの真玄の聖教目録四卷の撰述年時を表わすものではないわけで、この年時の前後頃の完成と推定されるだけである。

所で、この時期、即ち一七四〇年代において、相伝家による真宗の聖教目録の完成は、聖教目録編纂史上かつ真宗の宗学史上にとっても特筆すべき出来ごとであったと言わねばならないであろう。なぜならば、西派の学林の聖教目録完成は、山上正尊氏の『真宗々典編纂史』下(P40)に、

六年の歳月を費し、明和二年七月、統計六帙三十一卷、祖聖以降、中祖に至る製作並に傍依類に至る、三十九部六十七卷を採集し、每巻尾に各校異を附し、『真宗法要』と命題して、喜捨助刻、常光寺桂巖、直入院憲栄(奉巖)、養照寺海輪、西福寺了因、法泉寺聞諦、万福寺審亮、重誓寺隆賢、源光寺泰応、西光寺桂山、大平寺仙溪、其他云々を得、本山蔵版として流行せしめたのである。

とあり、この明和二年(一七六五)の『真宗法要』を以って、完成に当てることができよう。また、東派の学寮では、『真宗々典編纂史』上(P36)に、

文化八年、祖聖の五百五十回忌辰を迎ふるを期として、祖聖より中祖並に傍依の聖教三十九部を十三卷二帙に編し、『真宗仮名聖教』と題し、本山蔵版として流行せしむるに至ったのである。

とあり、文化八年(一八二二)の『真宗仮名聖教』をもって、聖教目録の完成がなされたと見られよう。従って、真玄の一七四〇年代という聖教目録完成期においては、いまだ東西両派の学林・学寮では、聖教目録については醸成期の時であり、それ故に西派の完成は、真玄に遅れること二十年余りであり、東派では、八十年近く後のことである。しかも東派の『真宗仮名聖教』は、西派の『真宗法要』に依存する面が多くあって、実際、東派独自の聖教目録の完成は据え置かれたままとされていると思われる。

以上から窺へば、相伝家の聖教目録完成がいち早く成されていたことが知られよう。

所で、何故に相伝家が、聖教目録の完成を他の学林や学寮よりも素早く、成し遂げたのであろうか。その理由として、一、二の推測が考えられるのである。まず一つは、寂玄転派によるため、二つには、学寮の謗難によるためと見られる。

一、光善寺寂玄の西派での異義邪執の排斥に対して、東派転派後、息子一玄及び孫の真玄によって、その謗法の難の原因を聖教の正依、傍依の選別なく、学林教学が起ってきたと見ていたが故。

二、東派の宗学も、西派同様となりつつ、聖道門の聖教解釈をもって真宗の聖教を理解する学寮の中から、相伝家に向って謗難の気運が起ってきたので、真宗の聖教理解は宗祖の聖教理解を基にしなければならぬという教学的立場を明確にして、その学寮への対抗が急がれて

きていたが故に、

この早期完成理由はともかくも、一玄、真玄父子の浄土真宗聖教目録への完成にかける熱意は量り知れぬものがあつたであらう。いま、真玄の『真宗依典籍』序文より、その意趣を窺つてみることにしよう。

凡そ、浄土一家におひて、経論積多分ある中につきて、古今とも真偽傍正のただち混雑して、其の分別正しからず。何れも迷惑せり。

其れが爲めに、先規の勘録等あり。しかれども、心静に彼此の記録、委細熟見に及ぶ処、其の題号には、或は、浄典目録、或は、真宗依典籍と置きながら、前後不分明のみならば、況や、今時の末学、初心の族ら、弥く、其の銚鏝これ多し。

清く、退き考みるに自宗の門侶等、惣じて、始学、経論転読の頃より、自余浄家の通途に伝ひ習て、少さか真宗別途・師資相承血脈の譜に疎きがゆへに、皓首の今に至て、闇推のことのみぞ、当時盛んなり。

茲因り、粗ぼ・伝聞口決の旨趣を開示して、真宗素意の別途を模写し奉るに、即ち、其の二つあり。

一には 正依の聖教。二には、傍依の典籍なり。

即ち、已下に目録し分書するがごとし。今ま、傍正の依用を挙て、差別するは、其の支証あり。謂く、経に、依法不依人の金言あり。釈に因人重法故の妙句あり。恭しくも、是れ、宗家黒谷、依法相承として、別解異見の不依人を楨び簡びたまふ。祖師別伝、因人

重法の血脈なり。若し、今ま、此の経釈互入の差別と、融通を口受の引導によりて弁せずば、人法二執の片見に沈没して、実に、当流已証に、相い稱ひがたからん。仍て、初心未熟、稽古のため、筆頭に顯すこと、左の如し。

(以下、『安永勘進』付録の聖教目録と同文、但し、後序の跋文を真照は省略している)

要約すると、古来より浄土一流には、経・論・釈が数多あり、先人の聖教目録には、『浄典目録』とか『真宗依典籍』と題名は、まことしやかであるが、實際中味は、真偽・傍正が混雑して、どれが真宗の正依の聖教か無分別である。そんな事で、今日の末学初心の徒が宗学を習うといつても他家の浄土宗の教相を手本とするため、今日、身勝手な論説ばかりになっている。それは、真宗一流の師資相承の口伝を知らないからである。それで、いま伝え聞く口受の開示すると、浄土の聖教に二種あり。一に正依聖教、二に傍依典籍。この如く正・傍に選別するには、その根拠があつてのことである。即ち經典には「依法不依人」の釈尊の金言があり、『論註』には「因人重法故」の曇鸞の妙句がある。そして法然は、釈迦の遺訓を守つて依法を相承して聖道・別解異見を選別された。親鸞は、曇鸞の釈意に順じて依人を相承して七祖の論釈を取されるのである。この人法二執の道理をここに弁証して、親鸞の御已証にかなう宗学を末徒に学んで欲しいために、これを顯らかにする。

右のごとく真玄が言うように、浄土教の聖教類の真偽・傍正の選定は、

浄土真宗の敎学を相承するか否かにかかっている問題である。それは浅井了宗氏が、『真宗聖敎の開版と本願寺蔵板の成立過程』（『竜谷大学論集』三七七号四一頁）でも指摘するように、

真偽未決の聖敎類の氾濫は敎学を混乱せしめ、安心の相承に異解を生ぜしめる結果ともなる。

これによって聖敎の選定が、安心・敎学の上でいかに重要であるかが理解出来よう。にもかかわらず、かかる重大な事柄でありながら、浄土真宗において、江戸中期に真玄の『真宗依典籍』一卷及び他三巻が登場するまでなおざりにされて来たことは、それまでの宗学が、玉石混着の中にあつたことを物語るものであろう。

以上、相伝家の聖敎目録の概略を述べてきたのであるが、これより以下、紙面の許す限り、年代順に真宗の聖敎目録類の考察を行っていきたいと思う。それは、真玄の聖敎目録四巻が生まれであるその背景を探求してみたいからでもある。

第二章 聖敎目録の編纂史

第一節 法然の『選択集』巻上

前章で取りあげた真玄の聖敎目録四巻が誕生してくるその歴史的背景を、現存する聖敎目録の考察を通して掘り起こしていきたく思う。

浄土真宗の聖敎目録を論ずるにあたり、そこで重要な事柄は、聖敎目録に載せる聖敎が、これは浄土真宗の聖敎であるという選定がなされているかどうかである。しかも、それが誰れによってなされたのかという点も重要な問題である。

いま、浄土真宗に於ける聖敎選定の歴史を繙くならば、まず最初に必要ななければならないのは、元祖法然上人である。上人は、『選択集』上にて、

『選択集』（『親鸞聖人全集巻六、八頁』）

往生浄土門と云は、これについて、二あり。一には、正往生浄土を明敎也。二には、傍に往生浄土を明敎也。始に正往生浄土を明敎と云は、謂、三經一論也。三經と云は、一には『无量寿經』、二には『観无量寿經』、三には『阿弥陀經』也。一論といふは、天親の『往生論』これ也。或は、この三經をさして、浄土の三部經と号する也。（中略）まさに知るべし、弥陀の三部經と云は、これ浄土の正依經也。

つぎに、傍に往生浄土を明敎と云は、『華嚴』・『法華』・『随求』・『尊勝』等もろくの往生浄土を明諸經これ也。また『起信論』・『宝性論』・『十住毗婆沙論』・『撰大乘論』等のもろくの往生浄土を明諸論これ也。

と、ここに法然上人は、浄土の正教と傍教を判別して、正教として「三經一論」説を顕らかにされた。更に、「弥陀の三部經と云は、これ浄土の正依經也」と述べて、そこに「正依」の語を用いることによって、浄土真宗の正しく依どころとする經・論を選定されたのである。そして、この正依の「三經一論」を以って、今まで偶宗であった浄土教を聖道門より独立させて、新しく浄土宗を開宗されたことは、周知の通りである。

所で、この法然上人が『選択集』で用いられた「正・傍」と「正依」の語が、それ以降の真宗の聖教目録編纂者たちに引き継がれていくこととなるのであった。そして、その継承は、やがて真玄の聖教目録四卷の上で花開くことになるのである。

第二節 蓮位の『浄土真宗龜鑑』一卷

親鸞聖人以降の浄土真宗の聖教目録については、蓮位房法阿の『浄土真宗龜鑑』一卷が、初期のものとしてあったといわれている。いま、その聖教目録の奥書には、

右此一帖は、河和田の唯円房所望、黙止しがたきによりて、日ごろ記し置ける法語の中を選出し記し畢、これひとへに真宗末代の龜鑑なり。深信仰すべし。必外見あるべからず。弘長三年四月六日、釈蓮位。(『仏書解説大辞典』より所引)

『相伝義書』相伝家の聖教目録について

と記されている。ここに年号として「弘長三年」とは、親鸞聖人滅後のその翌年(一二六三)のことである。この蓮位の『浄土真宗龜鑑』一卷について、江戸中期の東派の宗学者、安福寺先啓了雅(一二七〇～一七九七、七十八歳没)は、『浄土真宗龜鑑輯釈』二巻を著わし、この書中の四十八ヶ条の法語に註釈を設けている。しかし、西派の浄泉寺の芳淑房履善(一七五四～一八一九、六十六歳没)が、文化十五年(一八一八)に著わした『真宗法要義概』には、

此書の發賈一卷をも撰す。つぶさに彼にあり。望む者、就て披け。

この書、敵(泰敵の『藏外法要菽麥私記』一卷)・樸(僧樸の『真宗法要藏外諸書管窺録』一卷)・諸公の所覽に非ず。典志^{十二之三}(玄智)の『三卷本浄土真宗教典志』巻第一)にのみ挙録す。智公(玄智)も真賈の沙汰には及ばれざりき。(一)内は筆者補記)

と述べて、この『浄土真宗龜鑑』一卷の偽作説を主張しているのである。履善の偽作説の主張は、以前よりのもので、文化二年(一八〇五)に著わした『真宗龜鑑發賈』一卷でも、その偽作の論評をすでに行っていたのである。

東派の満徳寺の妙音院了祥(一七八八～一八四一、六十五歳没)も、『異義集 自稿本』第四巻にこの『浄土真宗龜鑑』一卷を写録して批判を加えている。そして、この書の偽作の証拠を、『浄土真宗龜鑑』の文中には、

山科興正寺は、六字の宝号を本尊とす。

とあるが、興正寺の名は、正中（正中元年は、一三二四年、親鸞聖人滅後六十二年目。蓮位没後四十六年目、蓮位が聖人滅後の翌年に著述した頃は、いまだ興正寺の名がなかったという）以降のことであると考証して、この書は、とても蓮位作とは考えることができない。またこの偽作した年時も新しきものとも評しているのである。（『仏書解説大辞典』より参照す）

この蓮位の『浄土真宗亀鑑』一卷の真偽については、今は調査不足のため先輩諸師の説を挙げるにとどめる。それで、蓮位の聖教目録がどのようなものであるかのみをここに紹介しておく。

安永七年（一七七八）に、西派の慶証寺の文殊院玄智景耀（一七三四～一七九四、六十一歳没）が著わした、『三卷本 浄土真宗教典志』第一卷の中に、先啓の『浄土真宗亀鑑輯釈』が載せてあり、そこに『浄土真宗亀鑑』の法語として「凡四十八章」の項目名が掲げられている。それ故、その部分を抜き出して、大略を見てみよう。

『浄土真宗亀鑑輯釈』二卷

「巻尾の記す所に依るに、弘長三年四月六日。下間蓮位。河和田唯円の望みに応じて、法語を選録す。之に云く。後人稱して真宗亀鑑と曰う。所列法語。凡そ四十八章。①謂一向専修訣。②信心相貌訣、③信一念釈、④行一念釈、⑤信行具足訣、⑥信不離行訣、⑦自力他力訣、⑧信誓願証文、⑨行不離信訣、⑩一念業成釈、⑪称名本願訣、⑫生死無常釈、⑬凡夫得生釈、⑭光明名号釈、⑮一

心専念釈、⑯衆生称念釈、⑰言南無者釈、⑱生死之家釈、⑲覚信房了解、⑳二菩薩引導、㉑行状例証、㉒恭敬教示、㉓造寺意旨、㉔太子安置意、㉕本尊意旨、㉖弔亡者意旨、㉗受施意旨、㉘謗法制誠、㉙偏執制誠、㉚邪說制誠、㉛諍論制誠、㉜放逸造罪誠、㉝兩舌妄語誠、㉞博奕双六誠、㉟男女同座誠、㊱魚鳥五辛誠、㊲酒狂制誠、㊳没後念誦、㊴平生勤修、㊵慈善尼御忌、㊶元祖御遠忌、㊷敵父御遠忌、㊸敵母御遠忌、㊹千部経結願、㊺磯長御夢想、㊻六角堂夢想、㊼蓮位房夢想、㊽如来大悲讚、是れ也。宝曆十二年壬午二月。象山禿氏先啓。之を校刻する間、私註を加う。題、浄土真宗亀鑑輯釈と云う。評家の説無し。蓋し所覽に非ざる耳。」（『真宗全書』巻七四P 213、番号は筆者付記）

以上を拝見すると、『浄土真宗亀鑑』は、聖教目録には違いないけれども、それはある意図に基づいて書かれた法語の編集もので、一般的に言う聖教名の列記する聖教目録ではないようである。いわば法語集というべき類いのものと窺われるのである。

第三節 存覚の『浄典目録』一卷

1 真宗寺本『浄典目録』の写本

親鸞聖人以降における真宗の聖教目録については、その代表作となる

のが、存覚光玄（一二九〇～一三七三、八十四歳没）の『浄典目録』であることは言をまたないであろう。この存覚師の聖教目録の撰述年時は、その奥書に、

随思出_二大概記_一之 康安二年_{壬寅} 五月二十六日（『真宗全書』

卷七四 「思い出すに随って、大概これを記す」

とあり、康安二年（一三六二）は、存覚師が七十三歳の時のことである。所で、この『浄典目録』の所望者について、諸文献等では、善如上人の所望によってこの聖教目録を存覚師が撰述したと記している。例えば

大谷大学篇『真宗年表』（昭和五三年発行）には、
（康安二年）5・26 存覚、善如のために「浄典目録」を編む。

（奥）

とあるが、これはいかなる資料に基づくものであろうか。『浄典目録』の写本である真宗寺本、光徳寺本、恵空本、龍谷大学本、光善寺本などには、次の如く書かれている。（『真宗全書』掲載のものを引文す）

謝徳講式

依_二荒木満福寺住持空暹_{大徳} 所望草_レ之

報恩講 嘆徳文

依_二俊玄律師所望_レ之

随_二思出_二大概記_一之

康安二年_{壬寅} 五月二十六日

『相伝義書』相伝家の聖教目録について

信貴鎮守講式依_二当寺学頭叡山宝塔院寂蓮_{師説}草_レ之 但非_二浄土宗事_一

浄典目録

此両帖上ニ不_レ被_レ載_レ之御忘却歟。仍今載_二加之_一

このように行の配列がなっている。つまり、「依俊玄律師（善如上人）所望草之」の文は、前掲の「報恩講 嘆徳文」にかかる註釈文であって、後掲の「随思出大概記之」にかかるものでないことは、明らかであろう。従って、この『浄典目録』の所望者を善如上人とするのは誤りと見るべきではないだろうか。

さて、聖教目録の中でも代表的な地位を持つ『浄典目録』であるにもかかわらず、存覚師の直筆本が現存していないのである。それ故、『浄典目録』の原本がどのようなものであったのかは、その書写本より推測するよりほかないのである。それで、相伝家である真宗寺所蔵の書写本をもって『浄典目録』を窺うことにする。この真宗寺書写本は、存覚師の末子で、後に木辺錦織寺第五世宗主となった、慈観綱ごうごん（一三三四～一四一九、八十六歳没）の真筆写本として伝えられてきたもので、現在は真筆写本とする判定は差し控えられている。いま左記に転載する写本は、光善寺第十四世達玄が、堺の真宗寺にて綱ごんの『浄典目録』をもって書写したものである。（真宗寺書写本と校合す）

(外表紙) 淨典目録	<small>存覚上人御作 綱殿僧部書添也</small>	全
(内表紙) 淨典目録	<small>存覚上人御作 綱殿僧部書添也</small>	
註論上下二卷	論ノ註トモ云 <small>慧覺和尚造 本ハ四論宗ノ人也</small>	
略論 一卷	同造	
安樂土義一卷	同造	
安樂集上下二卷	<small>道緯律師造本ハ程繁宗ナリ 駕師異代ノ弟子ナリ</small>	
觀經義 四卷	常ニハ疏ト云	
第一玄義分		
第二序分義		
第三定善義		
第四散善義		
法事讀上下二卷	<small>第二卷ヨリ第四卷ニ至ルマテハ依文ノ釈也 經ヲ文々句々ニ釈スル也</small>	
往生礼讀一卷		
般舟讀 一卷	<small>已上宗家普導大師ノ釈五部九卷也 五書九帖トモ云此中ニ義四卷ヲハ大書トモ云也 自余ノ四部五卷ヲハ具書ト云云也大師ハ 轉公面受ノ弟子ナリ</small>	
群疑論七卷	<small>懷感禪師造 導師面 受ノ弟子也</small>	
瑞心剛伝一卷	<small>少康法師ノ造 普導和尚異代ノ弟子稱後普導</small>	
已上淨土宗五祖ノ釈也		

五会讀一卷	法照禪師ノ作	
念仏鏡 一卷	<small>此師ハ誰人ノ弟子ト云事不分明是ヲモ後普導ト云 渡天シテ清涼山ノ生身ノ文殊ニ逢タテマツリン人ナリ</small> 道鏡善導共集ト云々	
淨土論 三卷	迦才作 三論宗ノ人也	
大經疏三卷 <small>上下中</small>	淨願寺惠遠造 三論宗	
同疏 三卷 <small>上下中</small>	嘉祥寺 吉藏造 三論宗	
同疏三卷 <small>上下中</small>	憬興撰	
同疏上下二卷	義寂撰 天台宗	
同疏	法位撰	
觀經疏三卷 <small>敬</small>	法聰撰	
同疏一卷 <small>敬</small>	淨願 影イ	
同疏一卷	嘉祥	
同疏一卷	天台大師	
同疏	法驗	
同疏	法常	
同疏	靈芝 元照律師	
正觀記上中下三卷	戒度律師 <small>元照弟子也 釈彼疏</small>	
弥陀經義疏一卷	元照律師	
聞持記	戒度 <small>釈元照義疏</small>	
同經疏	孤山智円	
同經通讀	慈恩大師	

龍舒淨土文三卷

俗人也
王日休

梁邦文類五卷

石芝宗曉

已上唐土

已下和朝
往生要集三卷 分本末
為六帖

惠心先德作 權少僧都源信
天台宗

往生十因

禪林先德作 權律師永觀
三論宗

選採集 二本末
二帖

黒谷先德御作 源空
上人

三部經講釈

同上人御作

教行信証文類六卷

依本末交
為八帖

同文類聚鈔一卷

同文類聚鈔一卷

愚禿鈔上下二卷

已上本願寺親上人御作

先師御作

報恩講式

口伝鈔上中下三卷

依乘尊望申為彼執筆
被記之

執持鈔

願々鈔

最要鈔

本願鈔

是等者所望之聲在之時楚忽一言
被記与之者也 和字法語也

持名抄 一卷

淨土真要抄一卷 本末

『相伝義書』相伝家の聖教目録について

弁述名躰抄一卷

破邪顯正抄 申状三卷

諸神本懷集抄イ 本末

女人往生聞書一卷

已上依空性了源望草之

顯名抄一卷 本末

依了円明光所望草之

步船抄 一卷

決智抄 一卷

同所望草

報恩記 一卷

依同所願空望草之

選採註解抄五卷

依同所光照寺住持慶願明尊草之

纒解記 一卷 出雲路所望

謝德講式

依荒木満福寺住持空暹範盛大德所望草之

報恩講

嘆徳文

依俊玄律師所望草之

随思出大概記之

康安二年^壬五月廿六日

愚作

信貴鎮守講式

依当寺字頭教山宝塔院
觀經律師誦草之
但非浄土宗事

浄典目錄

法華問答一帖

是所望之仁不存知若決智抄
所望之仁敬

此兩帖上二不被載之御忘却仍今載加之

法語一帖

是ハ出雲路契縁禪尼所望云々

御作
六要抄

八卷 分為十卷

安政二年六月以撰劔界真宗寺所伝古写本書之

後又河州松谷光徳寺所蔵以古写本一校早

法語

釈達玄記

2 『浄典目錄』の題号

この『浄典目錄』という題号について、山上正尊氏は、『仏書解説大辞典』の中で、

因みに浄典目錄、或は真宗正依浄典目錄と題するは、後人の所案にして古写本になし。浄土（真宗）の典籍目錄、或は真宗の正依たる浄土典籍目錄の謂なるべし。

と述べて、題号は不詳としている。また、『真宗全書』登載の『浄典目錄』にも

◎私云首尾題号及撰号
原本無今私安之
◎浄典目錄

存覚撰

とあり、題号と撰号が原本書写本にないことを欄外上の註に記しているのである。現在、存覚師の真筆本がないため、題号や撰号がどのようになつていたのか知るよしもない。それでは、この存覚師の聖教目錄を『浄典目錄』との題号をつけて呼んでくる、最初の聖教目錄は何かと言えば、それは、相伝家である願得寺第一世実悟兼俊（一四九二～一五八四、九十三歳没）が、撰述した『聖教目錄聞書』一巻である。この巻末に、「浄典目錄 一」として出てくるのである。更に、その奥書には、

永正十七庚歳 無射末三日書 清沢隠士桑門兼俊

とあれば、実悟二十九歳の永正十七年（一五二〇）九月二十三日に記したことがわかり、この年時の記載より、永正時代つまり室町中期頃には、存覚師の聖教目錄を『浄典目錄』と呼び習わしていたことが知られるのである。

所で、この題号の件について、いま一つ問題がある。というのは、相伝家の光善寺所蔵の聖教目錄類の中には、『浄典目錄』の題号では、記載されていないのである。

一、光善寺第九世寂玄撰の聖教目錄『典籍集 全』には、存覚師御作の欄には『浄土典名鈔』一巻と出ている。

二、第十世一玄撰の聖教目錄『浄典目錄 全』には、『浄典名録』一巻と共に別の所には『浄土典名鈔』一巻の名が出ていて、その撰述名の

記述がない。

三、第十一世真玄撰の聖教目録『真宗依典籍』には、存覚師作の欄に『浄土典名抄』一卷と出ている。同様に『浄土真宗依典籍私考 本』中の「浄土真宗傍依典籍」でも存覚師の欄に『浄土典名抄』一卷の名が見える。

以上の光善寺三師の聖教目録には、『浄典目録』という題号の名が見えず、『浄土典名抄』とか『浄典名録』の題号としか出てこないのである。また、相伝家の真宗寺の聖教目録も光善寺と同様のことが言える。

一、真宗寺第十六世真覚撰の聖教目録『浄土真宗依典籍目録 勘考下』の中の「浄土真宗傍依典籍」では、存覚師の欄に『浄土典名抄』一卷とある。

二、第十七世真昭撰の聖教目録『当流聖教目録之事』（『安永勘進』）には、存覚師の欄に『浄土典名抄』一卷とある。

また、相伝家であった性応寺第七世了尊の子息一雄が撰述した聖教目録『真宗正依典籍集』にも存覚師の欄には『浄典目録』の題号はなく、『浄典名録』一卷の名のみしかない。

このように見てくると、存覚師の聖教目録の題号には三種あって、一、『浄典目録』、二、『浄典名録』、三、『浄土典名抄』である。そして、二と三の呼び名は、特に江戸期以降の相伝家において継承された題号と言えるようである。

『相伝義書』相伝家の聖教目録について

3 『浄典目録』の構成

一般的な聖教目録の構成は、一、經典部。二、論部。三、釈部。四、史伝部。五、儀式声明部。六、目録部。と六種程に配分することが出来る。しかし、浄土真宗の聖教目録の構成は、一応は一般的な分類法に準じながらも、相伝家が主張するように、一、經典部に關しては「依法不依人」の教相を用い、二、六までの部は、「因人重法故」の教相を守る立場で、目録の編纂が成されるのが理想的である。いまこの視点より真宗の聖教目録の構成図を描くならば、

一、經典部 浄土三部經

二、論釈部 七祖聖教

三、教相部 宗祖撰述

四、口伝部 列祖等撰述

五、史伝部 末徒記録

という具合になるであろう。

さて、上記の聖教目録の構成を念頭に入れながら、存覚師の『浄典目録』の構成を考察していこう。そこで、いまこの論を推めるにあたり、異本の『浄典目録』写本等もあるため、一応、底本を『真宗全書』巻七四（凡例、『浄典目録』は、仏教大学所蔵の古写本を底本とし、大谷大学所蔵真宗寺本影写を以て之を校し其校異を冠頭に掲げり）と定めておくことにする。

存覚師の『浄典目録』は、まず曇鸞の『浄土論註』より書き始められている(前六六頁参照)。常識的に考えれば、浄土真宗の聖教目録であるから、浄土三部経と浄土論のいわゆる「三経一論」の掲載が巻頭にあっても不思議ではない筈である。それがそうならないのはどうしてであろうか。全く、經典部の欠落を思わしめるのである。それで、この件について考えてみるに、恐らく、存覚師は、すでに法然上人が浄土真宗の聖教として『選択集』に「三経一論」を掲げられており、末学の浄土教徒にとっては自明のこと故、「三経一論」は元祖の『選択集』に委ねられていたものであろう。そして、自らは、中国の「浄土宗五祖」及び浄土教系の註釈家をはじめ、日本の浄土教系三祖、並びに宗祖や覚如上人の撰述部とともに、自らの著述等を順を追って列挙することをもって、浄土真宗の聖教目録なるものとして『浄典目録』を編纂したのではないだろうか、とかく推察するのである。

この存覚師の『浄典目録』が採った「三経一論」の省略は、それ以降の真宗の聖教目録編纂の上で、ある影響力をもっていたとも考えられる。なぜなら、性応寺一雄が聖教目録編纂の上で、『浄典目録』に「三経一論」を増加するまでは、それまでの真宗の聖教目録中に全く經典名を見い出すことが出来ないからである。また、このことが原因であるのか、真宗の聖教目録類の中で、「三経一論」の記載があるものと、ないものとの二種類の系統があるのも事実である。そこで、その記載の有無について聖教目録類を分類してみると次の如くなる。ただし、存覚師の『浄

典目録』の系統に直接属しないものはその対象から除くこととする。

- 甲 群「三経一論」の記載なきもの
- 一、『浄典目録』 仏教大学蔵本(現龍谷大学蔵本)
 - 二、『浄典目録』 網蔵書写真宗寺本
 - 三、『浄典目録』 光徳寺本
 - 四、『聖教目録聞書』
 - 五、『浄典目録』 恵空書写本
 - 六、『真宗録外聖教目録』
 - 七、『月筌聖教目録』
 - 八、『浄典目録』 存覚上人御作
網蔵僧都書添也 全
- 乙 群「三経一論」の記載あるもの
- 一、『真宗正依典籍集』 一雄撰
 - 二、『典籍集 全』 寂玄撰
 - 三、『浄典目録 全』 一玄撰
 - 四、『真宗依典籍』 真玄撰
 - 五、『浄土真宗依典籍私考 本末・補記』 真玄撰
 - 六、『浄土真宗依典籍目録 勘考上下』 真覚撰
 - 七、『当流聖教目録之事』 真昭撰
 - 八、『浄土真宗書目』 恵林撰
 - 九、『浄土正依経論釈偈讚法語目録』 随惠撰
 - 十、『浄典目録 全』 歌苑撰

甲群の「三経一論」の記載なきものは、存覚師の『浄典目録』の形態を継承している故に、これらを「存覚『浄典目録』継承系統本」と名づけ、それに対し、乙群の「三経一論」の記載あるものは、存覚師の『浄典目録』の形態を踏襲していない非継承系統の本で、むしろ性応寺一雄の聖教目録に順じているが故に、これらを「存覚『浄典目録』一雄系統本」と名づければ、聖教目録類を系統的に分類する大きな目安とすることができようであろう。

つまり、それは、存覚師の『浄典目録』を基礎として撰述あるいは書写した聖教目録類に二系統があつて、甲群は、『浄典目録』の原形を保持した「継承系統本」であり、乙群は、『浄典目録』に「三経一論」の増補を加えた「一雄系統本」であるということである。

今後、更にこれら聖教目録類を詳細に研究を重ねれば、目録類の縦割りの歴史的系統図が明らかになるかも知れない。

また、『浄典目録』の原初本なるものは、一、存覚師真筆本と二、網岐真筆書写本とのこの二本に撰まるものと推定されるのである。(現在、一は不明・二は不詳である。)

4 『浄典目録』の聖教列举部数

『浄典目録』の中にどれほどの聖教部数が列举されているであろうか。『真宗全書』書写本を基準にして窺うと、浄土典籍が、本篇には六十部の列挙があり、追加篇には五部の列挙があつて、都合六十五部の聖教類

『相伝義書』相伝家の聖教目録について

の配列によつて、この『浄典目録』一巻が出来上がっている。更にその内訳を左記に示すと、

一、七祖のうち中国篇三祖のもの

曇鸞大師——三部四卷。道綽禪師——一部二卷。善導大師——五部九卷。……以上九部十五卷

二、中国浄土教諸師のもの……二十四部四十九卷

三、七祖のうち日本篇二祖のもの

源信僧都——一部三卷。源空上人——二部二卷……以上三部五卷

四、日本浄土教諸師のもの……一部一卷

(以上、三十七部七十卷)

五、祖師親鸞聖人著述のもの……三部九卷

六、列祖二師著述のもの

覚如上人——六部八卷。存覚師——十四部二十卷……以上二十部二十八卷

(以上、二十三部三十七卷)

七、追加として存覚師著述のもの……五部十二卷

(以上、総六十五部一一九卷)

存覚師は、右の一〇六までの六十部一〇七巻を「思い出すに随つて、大概これを記」していったのである。更に、追加篇として五部十二巻を加えて、総巻数六十五部一一九巻の聖教類列举により、この『浄典目録』

が撰述されている。ただし、追加篇は、後人書き加えという説もある。山上正尊氏は、『仏教解説大辞典』で、

更に巻尾に五部を追記せるは、恐らく後人が師（存覚師）の自筆本より伝写せる際か、若くばそれ以後、之を漏らせる師の製作を廃忘（合か）に添加したのであろう。

と述べている。この後人追加説の正否の論究は、いまは省略する。

この存覚師の『浄典目録』が、真宗における聖教目録の一つの基盤となつて、それ以降新たに聖教目録が、編纂されたり、書写されたりしていき、やがて江戸中期に入って数々の聖教目録が輩出してくることとなるのである。

第四節 綱蔽の『浄典目録』書写本

慈観綱蔽（一三三四～一四一九、八十六歳没）とは、幼名光威丸といひ、存覚師の第七子にあたり、建武元年（一三三四、父存覚四十五歳）二月七日に生まれる。康永二年（一三四三）九月、十歳の時に随心院経蔽の門に入り、広橋大納言兼綱を養父として、十月十七日得度し、名を兼綱・経蔽の二師より一字づつ取り綱蔽とした。その後東大寺に入り修学して、次いで青蓮院の門侶となり、法印権大僧都に進む。また父存覚師に就いて真宗を学ぶ。観応二年（一三五二）七月七日、綱蔽十八歳の時、木辺錦織寺慈空が寂したので、錦織寺留守職の近江弘誓寺愚咄（不

詳一三五二）から存覚師はその後継に推されたが、固辞して替わりに末子綱蔽を錦織寺に入寺させた。その後綱蔽は、慈空の後をうけて錦織寺を確固たるものとし、後世、慈観綱蔽を中興の祖と呼ばれるに至った。錦織寺の法脈系統は、

（親鸞）— 性信— 願性— 善明— 愚咄— 慈空—（慈観）（北西弘『真宗史概説』P105）

である。

綱蔽は、貞治二年（一三六三）三月十五日、存覚師より『六要鈔』の書写を許され、永徳三年（一三八三）十一月二十八日に『宗門血脉譜』（浄土宗一流血脉譜系）を著わし、明徳三年（一三九二）五月十六日には、『六要鈔』を本願寺第三世善如上人に相伝する。以上が、綱蔽の略歴である。

さて、綱蔽は、存覚師の『浄典目録』を書写したことが、堺の真宗寺に伝わる綱蔽『浄典目録』書写本によって知ることができる。真宗寺所蔵のものが、綱蔽の真筆本かどうかは、本願寺派宗学院編『葛本真宗聖教現存目録』の真宗寺所蔵の項には（P152）

①南北朝 伝綱蔽（中略）⑥浄典目録（別筆）⑫表紙裏左上に左の貼紙あり

浄典目録 常楽台主御作

綱蔽僧都御筆

とあり、そこには「伝綱蔽」として真筆本への疑義が示されている。

では、綱蔽が、いつ頃父存覚師より『浄典目録』の書写を許されたの
であろうか。これは明確には分からないが、常楽寺第十三世寂恵昭意
(一六五三—一七五二 百歳没)の『鑑古録』巻下(『真宗全書』巻六
八 P 380)に、

同年(延文五年)存師 教行信証の註釈を製作したまふ。六要鈔と
号す。錦織寺慈観僧都に附属したまへり。その跋書に云く。

此御鈔者、列祖相承之要領。聖人領解之已証也。(中略)延文
五庚^{一七}子^十年八月一日、常楽台主存覚^{一七} 又曰、此鈔一部、禿

筆草本を以て、綱蔽大僧都、安置と為す。錦織寺書き置く所也。

(中略)貞治二^{癸卯}年三月二十五日 老衲光玄^{四七}

とあり、存覚光玄師は、延文五年(一三六〇)に『六要鈔』を著わし、
貞治二年(一三六三)の折り、子息綱蔽にその書写を許している。そし
て、その前年の康安二年(一三六二)にすでに『浄典目録』を撰述して
いたのであるから、綱蔽の『浄典目録』書写は、貞治二年の『六要鈔』
書写にそう離れない頃と推察することができるかもしれない。

所で、現存の「伝綱蔽」筆と伝えられる真宗寺写本と、光善寺達玄が
真宗寺本を書写した光善寺写本との間に、題号の下に書かれた撰号や筆
写名について、多少の相違がそこに見られる。^{註一}即ち、

①「真宗寺写本」——浄典目録

常楽台主御作

綱蔽僧都御筆

『相伝義書』相伝家の聖教目録について

②「光善寺写本」——浄典目録 存覚上人御作 綱蔽僧都書添也 全

この二本を見較べると、①真宗寺写本は外表紙に『浄典目録』とあり、
内表紙には、題号、撰号、筆写名の三行が貼紙にて書かれている。②光
善寺写本は、その三つが外表紙と内表紙に一行で書かれている。(九四頁
参照)。また、真宗寺写本では「常楽台主御作」と撰号が書かれている
が、存覚作を「常楽台主御作」と記するは余り例がない。願泉寺所蔵の
『歎徳文』の奥書に「常楽台主積存覚七十六歳」とあるなど三、四例し
かない使い方である。大体は、光善寺写本のごとく「存覚上人御作」と
なっている。次に、真宗寺写本では、筆写名を「綱蔽僧都御筆」とあり、
もし綱蔽自身が書いたものであれば「御筆」とは書かない筈であるから、
この貼紙の文字は、後人のものと考えられる。所が、光善寺写本では「綱
蔽僧都書添也 全」とあり、この文面だと綱蔽自身の可能性もある。な
ぜなら、後人が書いたものであれば、「存覚上人御作」と同様に「綱蔽
僧都御書添也」と「御」の一字を付加したであろうと考えられるからで
ある。ただし光善寺写本のみにある外表紙の「全」の一字は、これは寂
玄、一玄の父祖の聖教目録の題号を継承したものである。(五八頁参照)
江戸末期に達玄が、真宗寺本を書写したのが今の光善寺写本であるに
もかわらず、このように相違しているのはどうしてなのであろうか。
達玄が書写した折りに、右の貼紙が真宗寺本に付いていたとすれば、達
玄も同様にその貼紙を書写した筈に違いない。達玄が書写したものがこ
れ真宗寺本とは別本(綱蔽真筆本以外の写本)であったなら、何も現存

の真宗寺写本にあえて貼紙などする必要もなく、直接に内表紙に書けばよいことである。そう見てくると、次の如く推測することが出来よう。

それは、達玄が、真宗寺本を書写した時には、外表紙の題箋には「浄典目録 存覚上人御作 綱叡僧都書添也」と確かに書かれていたのが、その後、いづれの時にか表紙の書き題箋の剝落によって、後人が、外表紙に直に「浄典目録」と記し、内表紙には伝聞にもとづき「浄典目録 常楽台主御作 綱叡僧都御筆」と別紙に書き改めて貼付したと思われる。

以上の推測が成り立つなら、達玄の光善寺写本にある外・内表紙の記述の方が、原本の形式をとどめているものと窺われるのである。

それでは、光善寺写本が示す「綱叡僧都書添也」の「書添」とはいかなる意味を表わすものであろうか。それについて二つのことが考えられる。

一、「浄典目録」の本文中にある詞書きの部分を、綱叡が「書添」えた。

二、「浄典目録」の本篇までは存覚師の撰述によったもので、追加篇五部を綱叡が「書添」えた。

しかしこの「書添」の部分が、実際どれにあたるかは、存覚師の真筆本、乃至その原形を保つ写本が出現しない限り、推測の域を出るものではないであらう。

また、上記の論述にて、存覚師の撰号と綱叡の筆写名の記載があるものは、真宗寺写本と光善寺写本の二本のみで、達玄が光善寺写本の校合

に用いた光徳寺本や他の写本にはその記載がないことを途中書き漏らしたので、参考までに付け足しておく。

第五節 明了の『仮名聖教』二十四部と顕恵の『仮名聖教』数部

1 明了の『仮名聖教』二十四部

存覚師の『浄典目録』の後に編纂された聖教目録として古いものは、永正十六年（一五一九）の年号をもつ明了の『仮名聖教』二十四部と、顕恵の『仮名聖教』数部とがあることを、山上正尊氏は、『真宗々典編纂史』下（P33）で指摘されている。

されば此期（永正頃一五〇〇年代）の聖教蒐集に関して、極めて眼福少く、他にも種々あるべきことながら、予の披覧したものとしては、「端ノ坊旧蔵本」にて明了の所持若くば、所写の「仮名聖教二十四部」大谷大学図書館蔵と「常楽寺旧蔵本」にて顕恵所持若くば、所写の「仮名聖教数部」竜谷大学図書館蔵とで何れも室町中末期に属するもの 例せば前者（常楽寺本）のうち「歎異抄」一本に「永正ウノトシ十二月十二日」と記してある。が現存するので、当時の衆徒も蒐輯には努めていたことを立証し得ると思ふ。

ここに、明了の『仮名聖教』二十四部の一つ「歎異抄」に、「永正十六ウシノトシ」の書写年号が記入されているとある。これは、有名な「歎

異抄』の写本『永正本』（『端ノ坊本』とも）のことで、この書写年号をもって名づけられたものである。多屋頼俊氏の『歎異抄新註』解題（P12）には、

本文の終りの綴目に小さく『永正十六ウノトシ十二月十三日』とある。本書を写した年月日と考えられる。これに依って永正本と呼ばれる。即ち永正本は右の蓮如上人本より約四十年後に写されたものである。筆者は未詳。

とある。明了と名告る人物は、四、五人いて西念寺明了・延寿寺月感明了・長泉寺明了・高田派真台寺猛火明了で、もう一人端坊に明了と名告る人物がいたと推測したい。もし、明了と名告る人が、「永正十六」年にこの『歎異抄』を書写した本人であるとすれば、その当時生存していたと推定されるのは西念寺明了と未確認の端坊明了とである。西念寺明了は、第八世蓮如上人の教化をうけた中村源六郎入道益慶道徳という『御一代記聞書』などで有名な道徳の息子である。しかし、西念寺明了と端坊との関係も不詳であり、端坊明了と同一人物なるかも不明であるので、敢えて、端坊明了なる人物の存在を想定しておきたい。金子大栄氏は『歎異抄』（岩波文庫P25）の中で、

端の坊は京都六条辺にあった寺で、室町中期頃から記録に見えるが、その後どうなったか詳かでない。この端の坊所蔵の古写本は近年大谷大学に数本蒐集され、その中にこの（歎異）抄が二本ある。と、端坊や古写本の概況を伝えている。

それで、いま大谷大学所蔵の端坊古写本を『古本 真宗聖教現存目録』より拾い出してみることにしよう。

大谷大学所蔵 端坊古写本

- | | |
|-------------------------------------|-----------------------|
| 215 『一念多念分別事』 一卷 | 216 『後世物語』 一卷 |
| 218 『教行信証』 化土卷末一卷（延文五年釈智念 応安二年沙門尊理） | |
| 222 『文類聚鈔』 一卷 | 230 『尊号真像銘文』 一卷 |
| 232 『歎異鈔』 一卷（永正十六） | 233 『歎異鈔』 一卷 |
| 234 『安心決定鈔』 二卷 | 236 『口伝鈔』 三卷（表紙釈明善） |
| 238 『執持鈔』 一卷（嘉暦元歳道琳） | 239 『最要鈔』 一卷（表紙釈明了） |
| 240 『肝要記』 一卷 | 241 『最須敬重絵詞』 四卷 |
| 242 『浄土真要鈔』 二卷 | 243 『持名鈔』 二卷 |
| 244 『持名鈔』 末 一卷 | 246 『破邪顕正鈔』 一卷（表紙釈明了） |
| 奥書釈乘鎮（漢文） | 247 『破邪顕正鈔』 三卷（釈了源） |
| 249 『步船鈔』 二卷（永正十六年） | 250 『顕名鈔』 本一卷（表紙釈明了） |
| 251 『纒解記』 一卷（表紙釈浄□） | 257 『御俗姓』 一卷（文明十一年） |
| 258 『真宗用意』 一卷 | 261 『一宗意得之事』 一卷 |
| 262 『愚鑑鈔』 一卷 | |
- この本によると、端坊古写本は、二十五部あり、明了の記名本は三部となっている。山上氏が指摘する明了の『仮名聖教』二十四部とは、これらを指すものであろう。ただこの中に漢文の『教行信証』・『文類聚鈔』・『破邪顕正鈔』（漢文）との三部があり、仮名聖教は二十二部しかない

ことになる。

だがしかし、この明了の『仮名聖教』二十四部は、聖教名の列挙という目録的なものではなく、これは仮名聖教の蒐集ものであると言えよう。

2 願恵の『仮名聖教』教部

次に、願恵の『仮名聖教』教部についてであるが、山上氏は、「何れも室町中末期に属する」とだけ記して、願恵や聖教類の詳細には触れていない。

願恵は、常楽寺第九世佐恵（一五五〇～一六〇三、五十四歳没）のことである。『続真宗大系』巻十六（P169）には、

佐恵（法名願恵〔恵〕、法印権大僧都、常楽寺 本願分派之時属西派、慶長八 四月八日卒 五十四）

とあり、願恵の他のことについては、全く不詳である。

聖教類については、『古写 真宗聖教現存目録』には、竜谷大学所蔵として、次の六部が記載されている。

- 36 『尊号真像銘文』一卷（表紙 釈願恵）
- 38 『一念多念証文』一卷（表紙 釈願恵）
- 69 『願名鈔』（末）一卷（表紙 釈願恵）
- 72 『存覚法語』一卷（表紙 釈願恵）
- 74 『選択註解鈔』五卷（表紙 釈願恵）

96 『弥陀経義集』一卷（表紙 釈学念 願恵手沢本）

この聖教類が、山上氏の言う願恵の『仮名聖教』教部ということなのであろう。また、西本願寺所蔵として、願恵の記名を載せる聖教一部がある。即ち

『法華問答』一卷（表紙 釈祐玄 釈願恵）

しかし、この願恵の『仮名聖教』教部も、先の明了と同様に、聖教名を列挙するという目録ではなく、仮名聖教の蒐集の一部を示すものであると言えよう。

第六節 実悟の『聖教目録聞書』一卷

1 善徳寺の略譜と実悟の撰述意趣

前節の明了・願恵とほぼ同時代、即ち永正十七年（一五二〇）九月二十三日に撰述した願得寺の実悟兼俊（一四九二～一五八四、九十三歳没）の『聖教目録聞書』^{註二}一卷がある。この聖教目録は、山上正尊氏が大正十二年十月、富山県東礪波郡城端町にある真宗大谷派別院、善徳寺の宝庫から発見されたものである。そして、『真宗学報』第二号にこの聖教目録の一覧とその解説がほどこされている。

さて、この聖教目録の冒頭には、

（角印）（長方角印）

とある。そして、そこには、次の二つの事柄が提示されていると考えられる。

第一、「城端御坊」「善徳寺什」の二個の角印の印しによって、この聖教目録の伝承のありかが明示されていること。

第二、『聖教目録聞書』の実悟自筆の題号とその下にある註文の「当流に用いる所の聖教の外、聞き書きを聚むる者也」とによって、実悟のその撰述意趣が明らかにされていること。

まづ第一の伝承を示す「城端御坊」「善徳寺什」の二個の角印について、考察していくことにする。その前に少々善徳寺の寺跡について略説しておこう。

城端御坊は、文明四年（一四七二）蓮如上人の創建に係り、最初北陸巡化の砌、加賀の国河北郡井家荘内砂子坂において、本願寺第五世綽如上人の第四子周覚玄真（華蔵閣 改号興行寺）の遺跡を訪らい、そこに一字を建立して善徳寺と号した。蓮如上人住持の後、玄真の孫（永存の長男）蓮真玄永が善徳寺二世を継ぎ、その後寺跡は文亀年中（一五〇一～一五〇四）に山本の里へ、天文二年（一五三二）に福満の里へ、永禄二年（一五五九）に城端城跡に移転して現在に至っている。（『竜谷大学仏教大辞典』より参照）

さて、実悟『聖教目録聞書』の奥書に、

『相伝義書』相伝家の聖教目録について

とあり、実悟自身がこの聖教目録の撰述年時を明記している。そしてこの永正十七年の頃の実悟と二個の角印が示す善徳寺との間に、何らかの關係がそこにあったものと推測されるのである。そこで、永正十七年（一五二〇）を起点に考えてみると、善徳寺第二世玄永（一四四三～一五一一 六十九歳没）は、永正八年（一五一二）に没しているので、この聖教目録とは直接關係がない。善徳寺を継ぐはずの長男実円玄広（一四七四～一五〇九、三十六歳没）は、父玄永より二年前の永正六年（一五〇九）に没している。従って、善徳寺第三世は、玄広の長男円勝孝政（一四八九～一五四三、五十五歳没）が継ぐことになったのである。そこで、もし關係があったとすれば、この第三世孝政とのことであろう。

実は、孝政の末の娘が、実悟の養女となっているのであり、また興行寺蓮莞康恵の娘が、善徳寺孝政の妻となり、その妻の弟西蔵意伯は、実悟の養子となっていたりして、興行寺蓮莞や善徳寺孝政と願得寺実悟との間には、姻戚關係を結ぶほどの深い親交があったことが知られる。このような間柄であったことから、実悟の『聖教目録聞書』一卷が、善徳寺に伝えられてきたのではないかと窺われる。

ところで、この聖教目録がいつ頃に、いかなる経緯でもって善徳寺に伝来されたのか、その点に関して発見者山上氏も明らかにし得ていないのである。それと、この『聖教目録聞書』の存在が、大正期まで伏蔵さ

れて世に知られていなかったのはなぜか。また、願得寺には、この写本
 さえ現在伝えられていないのはどうしてなのかなど、疑問の点が多い聖
 教目録でもある。

次に、第二の題号と註文について、実悟は自らの聖教目録に『聖教目
 録聞書』と題号を置き、その題号の由来を下の註文に頭わしたのである。
 即ち、それは、「当流（まうりゅう）に用いる所の聖教」と、その「外聞（ほか）き書きを聚（あつ）む
 る者也」と述べて、この聖教目録の中に、二種類の聖教、一つは、当流
 依用の聖教類と、二つは外（ほか）の浄土教聖教類とを撰めたことを明らかにし
 ているのである。そして、当流依用の聖教類は、存覚師の『浄典目録』
 に依って記し、外の浄土教聖教類は、自らが散見したり、伝聞したりし
 て聚めたものをもとにして記したのである。それ故、題号を、この撰述
 の意趣に基づいて『聖教目録・聞書』と名づけたと窺われるのである。
 言い換えると、題号の『聖教目録』の上四字は、存覚師の『浄典目録』
 を指し示し、そこに存覚師の聖教目録の相承を表わし、『聞書』の下二字
 は、自撰の浄土教聖教類の増補を掲げたことを表示したものと、かく窺
 い知ることができるのである。

従って、この実悟の『聖教目録聞書』一卷の撰述は、存覚師の『浄典
 目録』の書写本形式から一步踏み出して、『浄典目録』に更に自撰の聖
 教類の増補を加えたことは、それは存覚師以降の聖教目録編纂史の上か
 らは、一つの画期的な試みでもあり、それ故、その後の聖教目録が、江
 戸期に向って歴史的な展開を果すべくその初期の聖教目録として、この

『聖教目録聞書』一卷は、極めて貴重な書物として位置づけられねばな
 らないであろう。

2 『聖教目録聞書』一卷の構成

この実悟の聖教目録の構成は、『浄典目録』を基調にして、外の浄土教
 聖教類を増補して織り込んだ形態となっている。いまこの構成の詳細は、
 この書の発見者山上正尊氏の研究『実悟兼俊筆聖教目録聞書解説』に譲
 ることにする。（『真宗学報』第二号P83）

この『目録』は云うまでも無く真宗聖教書目で、内題の下に当流用
 所之聖教之外聞書聚者也とある如く、所謂る七祖の論釈、宗祖、列
 祖の製作を中心として之に他部、云はば傍依類を混入せしめたもの
 である。その配列の仕方は聞書聚と云う。即ち聞いた通り思い出し
 た尽を書き続けられたようであるから、細部に亘っては乱雑ではあ
 るが、大体に於て漢文九十五部と和文即ち仮名之正教分（卷尾の十一紙下
 段欠処が六部あ
 るものとして
 百八十六部）との二大別とし、その漢文中にて更に印度支那（中に日本の伝部
 六家十一卷が、日本三十一に分け、総計二百八十一部が掲げてある。而
 して漢文の聖教の中にも別に異本として和文延書があり、和文中に
 も漢文体の異本のあるものもあるので、夫々その場処に於て註に真
 名仮名として懸に巻数が示されてある。これが実に本『目録』の研
 究上価値のあるところで、今日知ることも叶い難い珍しい書目が
 並べてあることと共に少なからず裨益を受くる点である。）

この実悟の『聖教目録聞書』の終り頁に存覚師の聖教目録を『浄典目録』として挙げてゐる。いま『浄典目録』の題号が、年号を持った書物に現われるのは、この『聖教目録聞書』が最初のものである。

第七節 了尊の聖教蒐集

性応寺了尊（一五八二～一六三八 五十七歳没）は、学史史上では西派学林の初期の学者として、光善寺准玄と共に活躍した人といわれている。この了尊の門下生には、月感・西吟・空誓など、その後の学林教学を賑わせた人達がいる。

しかし、相伝家側からは、性応寺了尊を次の如く見ている。

了尊は、慶長十三年（一六〇六）に西本願寺第十二世准如上人（光昭・理光院。一五七七～一六三〇 五十四歳没）が、本善寺第三世証珍佐順（一五三四～一六一五 八十二歳没）より真宗相伝の御返伝が行われた折、相伴の一人に加わり、その後、証珍より『教行信証』の伝授を受けた人である。そのことは、『法流故実条々秘録』に、

准如上人御代、慶長十三年の比歟。さかい真宗寺祐珍・性応寺了尊

・堅田本福寺・木津願泉寺浄了・西覚寺善性等、八九人御免候ふ。

其の時の師匠は、和州飯貝本善寺証珍、時に七旬有余なり。其の十ヶ年以前七八人御免、則ち、師祐徒など其の時御免の人数なり。

と、あることよって知られる。つまり了尊は、相伝家の一人であり、

『相伝義書』相伝家の聖教目録について

『性応寺系図』には、

元和四戊午霜月廿一日、御一家に加え召さる、同五年四月廿日、御見様に御指南仰せ付けらるに、御使え御めのと宰相也。

また、『真宗々典編纂史』下には、

嘗て准如の命を受け良如保導の任にあたり、『教行信証』を伝授し見台を賜り、或は連枝及び院内衆の為に講を披き、殊に聖教蒐集に志し、大に力を致したと云う。

とあり、相伝教学伝授の任務を負った人である。そしてその合い間に、聖教の蒐集をも勢力的に行っていたのである。藤原猶雪氏は、『性応寺累世の勤皇扶宗興学に就いて』（P28）の中で、

了尊は、京都に常住して典籍を蒐集し、其自記にかかるもの、焼失（元治元年、一八六四）前、他に流出せるもの、並に燼余の遺品に徴し、その数の多大なりしことは、息一雄をして真宗正依典籍集の輯録を容易ならしめたるに併せて、首肯することができよう。

と述べて、了尊の聖教類の蒐集によって、息子一雄が『真宗正依典籍集』を、若干十九歳で撰述することを可能ならしめたというのである。しかし現在は、了尊の蒐集した聖教類のほとんどは、

元治元年東本願寺、興正寺、本願寺学、林高倉学寮、松光寺等罹災には、京都性応寺に蔵置せられた聖教

典籍記録数十函は、転々火難を避けしが遂に今の京都駅付近には烏有に帰せしめたり。（右同、P27）

という仕末で、今日その僅かが残存するのみである。

第八節 一雄の『真宗正依典籍集』一卷

1 一雄の聖教目録の撰述意趣

性応寺一雄（一六〇六～一六三〇、二十五歳没）は、『性応寺系図』によると、

長七。慶長十一^{丙午}十月十日辰刻生す。元和五^{己未}二月七日未の刻得

度、十四歳。君名侍従、実名一雄、齐名三友、法名了胤。寛永七^庚

午九月十日卒す。廿五、女渡辺長門守昌女（『性応寺累世の勤皇扶

宗興学に就いて』藤原猶雪著より引文）

とあり、学績半ばで若死した人である。また、聖教目録の『真宗正依典籍集』を撰述した年について、その奥書に

寛永元年 季春 十八^{癸卯} 沙門一雄書之

とある。寛永元年（一六二四）は、一雄が十九歳の時である。その折り父了尊は四十三歳であった。そして、この『真宗正依典籍集』を撰述して六年後に、一雄は世を去ってしまったので、四十九歳になる父了尊は、相伝教学や諸般の事柄を一雄に託することが出来なくなってしまったことであらう。

次に、この『真宗正依典籍集』の題号と撰号については、この書の巻頭に（『真宗全書』本では）

真宗正依典籍集 性応寺侍従一雄撰

と自記してある。この題号中の「真宗正依」の四字の語は、聖教目録の編纂史上で初めて用いられたものと言えよう。これは、法然上人の、

弥陀の三部経と云は、これ浄土の正依経也。（『選択集』上）

との、聖教選定の指南を承継したものである。上記で述べた通り、法然上人は、浄土の正依の経論として、浄土の三部経と浄土論の「三経一論」を選定された。いま一雄は、この法然上人の「三経一論」の選定を相承する意図をもって、自らの聖教目録の冒頭初列より「三経一論」の聖教名と訳者名を列挙して、更に、それを明記する意味で、「真宗正依」の四字を題号に掲げ、この一卷を『真宗正依・典籍集』と名づけたのである。従って、この聖教目録の題号は、一雄自身の撰述意趣がそこに顕わされたものと、かく了解されるのである。

また一雄は、この聖教目録の撰述意趣を奥書に跋文として置いてもいる。

右斯の典籍者、当流の聖教目録也。残らず常楽台の浄典目録に編入す。且つ又、耳目に触れる所、見聞に随い書き加える者也。只だ是れ、初心始学の者、疑いの想いを起こさざらしめんが為已。（筆者書き下し文に直す）

ここには、四つの事柄が述べられていると考えられる。一つには、この『真宗正依典籍集』は、「当流の聖教目録」であり、他流などの聖教目録とは違って、浄土真宗の独自のものであること。二つには、存覚師

の『浄典目録』を基本として、これに漏れた例えば、「三経一論」や聖
覚・隆寛のものから、宗祖の著述及び覚如上人・存覚師・從覚・乗専・
蓮如上人までの列祖著述ものを残らず加筆して編入させたこと。三つに
は、真偽不詳だが宗祖、覚如上人や存覚師の著述と伝えられてきたもの
を、「耳目に触れる所、見聞に随い書き加え」たこと。四つには、真宗
を学ぼうと志さず初心者が、何が真宗の聖教であるのかという「疑いの
想いを起こさざらしめんがため」に、この書物を著わしたこと。

以上、この四つの事柄を内に踏まえて、一雄は、この『真宗正依典
籍集』一巻なるものを撰述したものと、かく窺うことができるのであ
る。

2 『真宗正依典籍集』の構成

この聖教目録の構成は、まず、浄土の三部経（異訳經典を挙げず）と
『浄土論』を挙げて、

これを浄土宗の正依の三経一論と云なり。

已上天竺説 已下漢朝

と詞書きを添えて、『浄典目録』にない「三経一論」を、冒頭に付け加
えている。そして、それ以下は、『浄典目録』に従い、宗祖の『愚禿鈔』
上下二巻』までを引用している。そして、新たに「入出二門偈 一巻』
・『和讃 三帖』・『尊号真像銘文 一巻』・『一念多念証文 一巻』・『唯
信鈔文意 一巻』・『三経往生文類 一巻』・『専修念仏問答鈔 一巻』

『相伝義書』相伝家の聖教目録について

（「少々不審アルガ」と、宗祖の著述六部と疑わしい一部の合計七部を
追加して、その後へ

已上祖師本願寺親鸞聖人御作

と、『浄典目録』の詞書きと同文を置いている。更に、宗祖の著述であ
る『消息集』二部を付加している。即ち、『御消息集 一巻』・『末灯鈔
二巻』である。

次に、覚如上人の『報恩講式三段 一巻』を掲げ、その下には、『浄
典目録』では存覚師が父覚如上人の著述を指して「先師御作」と書いた
が、一雄はそれを「覚如上人也、当流先徳御作」と、書き改めている。
そして、その後に『本願寺聖人伝絵上下 兩卷 同作』・『歎異鈔 一巻』
の二部を挙げ、次に『浄典目録』の『口伝鈔 三巻』を引用し、新た
に『拾遺古徳伝 九巻』・『安心決定鈔 二巻』を加えている。その後の
三部四巻は、『浄典目録』と同文を引用し、更に覚如上人の著述漏れ十
二部を増加編入させて、

これらみな当流先徳覚如上人の御作なりと云々

という詞書きで結んでいる。この覚如上人の結び文は、本来、

是等者所望之輩在之時。楚忽一言。被記与之者也。和字法語也。

と『浄典目録』ではなっているのを、一雄が書き改めたものである。

次に『六要鈔 十巻』が挙げられているが、『浄典目録』では、巻末最後
にあってしかも「八巻 分爲三十巻」となっている。そして、その後
には、『浄典目録』では存覚師の著述の終りに『謝徳講式』とあるのを

『嘆徳式文 一卷』とし、『報恩講 嘆徳文』とあるのを『同文意一卷』として、二部挙げている。そして、『持名鈔 本末二卷』以下十二部は、『浄典目録』と同部が挙げてあり、ただ『持名鈔』より三列目の『弁述名体鈔』と五列目の『諸神本懐集』とが入れ替えてあり、四列目の『破邪顯正申状 三卷 同所望』の後に、

右四部九帖と号す。蓋是宗家(善導)の五部九卷を摸して名としたるか

(一) 内筆者補記

と詞書きしているが、『浄典目録』には、「右四部九帖と号す」以下の詞書きなどなく、いつこの四部が、一括されてそのように呼ばれるようになったのか不明である。一雄の時代か、一雄が手本とした『浄典目録』には、そのごとく記載があったのかも知れない。

さて、以上で『浄典目録』の本文内の聖教目録の全部は、引用したので、追加付録の五部のうち『六要鈔』は、先に引用したので、『法華問答 一帖』と『法語 一帖』の二部を前の十二部目『纒解記』の後に挿入している。そして新たに六部が追加されている。即ち、『至道鈔 一卷』・『浄土宗名目 一卷』・『聖道浄土名目 一卷』・『浄土見聞集 一卷』・『正源明集 九卷』・『正信偈聞書 一卷』である。このうち四部は、実悟の『聖教目録聞書』にも出ているが、『至道鈔』と『正信偈聞書』との二部は見当らない。

『浄典目録』の追加付録五部のうち二部、即ち『浄典目録』と『信貴鎮守講式』は、いまだ引用されていない、その一つ『浄典目録』が六部

目の『正信偈聞書』の次に『浄典名録 一卷』の名で挙げられている。『浄典目録』が、『浄典名録』と異名で出てくるのは、この一雄の『真宗正依典籍集』が最初のものである。また、残りの一部の『信貴鎮守講式』は、この聖教目録より除外されており、『浄典目録』中、除外対象となったものは、これが唯一つである。

そして、存覚師の著述ものとして最後に、『三心三信同一事』が挙げられ、

右六要鈔と云より下、常楽台存覚御作也。この上人は覚如上人御真弟也。

との一雄の詞書きによって、存覚師の著述が結ばれている。そして、この聖教目録の最後の段には、

慕 婦 絵	十卷	乗專所望	從覚上人作
正信偈大意	一卷	金森道西所望	蓮如上人作
御 文	五帖		同 御 作
最須敬重絵		毫撰寺	乘 專 作
唯 信 鈔	一卷	安居院	聖 覚 作
一念多念	一卷	長楽寺	隆寛律師作

と、五師の六部が掲げられて、この『真宗正依典籍集』の聖教類列挙が完了している。

以上、この聖教目録の構成を見てきたのであるが、『浄典目録』への追加部数は、『三經一論』の四部五卷、宗祖著述の九部十二卷、覚如上

人著述の十六部二十六卷、存覚師著述の七部十五卷、諸師著述の六部十八卷であり、総追加部数は四十四部七十六卷となり、減少は一部一巻のみである。単純計算すると、『浄典目録』の六十五部一九九巻に加えること四十四部七十六巻、それより一部一巻を差し引いて、一〇八部一九四巻という聖教類の列挙によって、この『真宗正依典籍集』一巻が出来あがっていることになる。

所で、一雄が自撰のこの聖教目録に引用した『浄典目録』は、『真宗全書』のものとも、また真宗寺写本とも光徳寺写本とも、その系統を異にしていると考えられる。構成のところで見たごとく、聖教名や詞書き等、右三本の写本にないものがあり、また、徴しく相違する所といえ、右三本の『浄典目録』では、

観經義 四卷 常ニハ疏ト云

第一玄義分 經ノ大意ヲ釈ス

第二序分義

第三定善義

第四散善義

第二卷ヨリ第四卷ニ至ルマテハ。依文ノ積ナリ。經ヲ文々句々ニ積スルナリ

とあるが、『真宗正依典籍集』が引用したと思われる『浄典目録』では、

観經義 四卷 常ニハ疏ト云 善導大師造

とあるだけで、四巻の巻名も後の詞書きもない。しかもこれだけでなく

『相伝義書』相伝家の聖教目録について

相違点は、他にも多くあり、先の写本三本とは明らかに相違した別系統の写本と見ても差し支えはないものと考えられる。ついでに、『真宗全書』の書写本と真宗寺写本とは、また別系統のものとみられ、光徳寺写本は、真宗寺本系統を引くものと推察されるのである。なぜなら、真宗寺写本、光徳寺写本は、

大經疏 三卷^{上中}_下 淨願寺 惠遠造 三論宗

とあり、そこに「淨影寺」を「淨願寺」と明らかな誤りを二本ともしている点などである。ただこの二本は、全く同文でもなく、五、六ヶ所相違する所もあり、疑問の残る点もある。

最後に、この一雄の『真宗正依典籍集』の特色は、何度も繰り返すようだが、聖教目録の中に、冒頭に「三經一論」を取り入れたことである。そして、この一雄の「三經一論」増補形式に擬った聖教目録が、これ以後輩出することになっていく。そこで、先述したごとく聖教目録の編纂史の分類上で、『浄典目録』本文に加えて「三經一論」が増補されているものを「存覚『浄典目録』一雄系統本」と名づけ、増補されていない原形維持のものを「存覚『浄典目録』継承系統本」と名づけて、聖教目録類の分類上の目安ともなればと考える次第である。

また、この一雄の『真宗正依典籍集』一巻は、後に相伝家真玄の『真宗依典籍』及び『浄土真宗依典籍私考 本・末・補記』の四巻を生み出す元になるものである。その意味から逆に推すれば、この一雄の『真宗正依典籍集』一巻の撰述に際し、相伝家であった父了尊の指南が、そこ

に多分に含まれていたとも考えられるのである。いづれにせよ、この一雄の聖教目録の出現によって、後の相伝家たちに与えた影響力は、甚大なるものがあつたと言ひ得ることができるのである。

第九節 寂玄の『依典籍 全』一巻

1 寂玄の書写本と一雄の真筆本との相違

光善寺の第九世仏乘院寂玄常頭（一六五五～一七二六 七十二歳没）は、西派の相伝家の一人であつたが、第三代能化職代の光隆寺知空大可（一六三四～一七一六 八十三歳没）は、相承教学を異義・邪執と決めつけて追放の処置をとつたため、余儀なく元禄九年（一六九四）に子息一玄と共に東派へ帰参することになつたのである。しかも、この時の罪状は重くして、初代能化職代であつた光善寺第七世准玄円雅（一五九〇～一六四八 五十九歳没）の能化職代の名さえも憤怒の余り抹殺して、西派能化職代の歴代を初代西吟とし、知空自らを第二代とするなど、常識では理解し難い行動を取つたのである。恐らく、これほど厳しい扱ひをすることは、この事件を契機に西派より相伝家の撲滅を目論んでいたのかもしれない。

光善寺第十四世達玄（一八二五～一八七一、四十七歳没）が、安政三年（一八五六）に光善寺所蔵の聖教類の収納位置を記録した『天 黒塗

書物単筒入目録 出口所蔵』なるものがある。そこには、聖教類の列挙とともに所持者あるいは、書写人、校合人の名前が記載されてある。またこういった目録は珍らしい聖教目録の一つでもあるろう。それで、その中に、第六世准勝昭珍（珍雅・一五六八～一六三九・七十二歳没）の書写した聖教類が四十二冊余りと、刊本の聖教類の所持本が七冊ある。第九世寂玄筆の書写本が十二冊程あり、第十世一玄筆の書写本が五十二冊余り、他に真玄筆・達玄筆らの書写本などの記述がみえる。そこで不思議なことは、初代能化職代であつた第七世准玄筆のものは何一つ見当たらないのである。そのことは、准玄が学林を退職する折りにか、自筆の書写した聖教類を学林へ寄贈していったのかも知れない。だがその件については、よく分からない。

いま、この達玄の『目録』から分かることは、光善寺の大半が、准勝、一玄の二師によって蒐集され、書写されてきたことが知られるのである。

さて、寂玄が『典籍集 全』を撰述した年時については、その奥書に、

典籍集 畢 性心寺侍従作

延宝第七歳次 氏末初穂下旬 第二日 揮写毫 於閑窓山

とあり、ここに、延宝七年（一六七九）の寂玄二十四歳の時、性心寺一雄侍従作の『正宗正依典籍集』を書写したことが記されている。所が、この寂玄が書写した一雄作の『真正依典籍集』は、どこの寺の所蔵もの

かが明記されていない。いま『真宗全書』に転載されている『真宗正依典籍集』は、その凡例に、

『真宗正依典籍集』は、仏教大学所蔵一雄師自筆本を以て編入せりとあり、この一雄自筆本と寂玄の書写本『典籍集 全』とを比較すると、寂玄書写本は、内題に『真宗正依典籍集』とあって「正」の一字が脱落しており、また本文中の『天親浄土論 一卷』と自筆本にあるのが、『浄土論 天親造』となっていたり、その次の詞書きが、自筆本では「已上天竺説」の前にあるのが、後に置かれていたりして、寂玄の『典籍集全』は、最初の段から、自筆本との相違が目立っている。更にその大きな相違を挙げるならば、

一、親鸞聖人の著述のところには、『真宗行儀鈔 三卷 祖師聖人作』とあり、存覚師の著述欄には『広末 一卷』・『一期記 一卷』とあり、都合三部が増補されていること。

二、存覚師著述の下段に『報恩講』・『嘆徳文』・『本願鈔』など不自然な書き入れがあること。

三、覚如上人著述欄では、聖教目録の配列に三、四ヶ所の移動がみられること。

以上のような相違の点があることから、寂玄が書写した『真宗正依典籍集』は、明らかに一雄真筆本ではなくして、その他別本の書写本、即ち一雄真筆本より誰れかが書写したのか、それに加筆したものををもって寂玄が書写したと考えられるのである。

『相伝義書』相伝家の聖教目録について

2 寂玄の校合と補記

また、寂玄は、自ら書写した『典籍集 全』^{註四}を他の異本を以って校合を行ない、訂正文や不足の部分には書き足しなどもほどこしている。そこで、寂玄の『典籍集 全』の中から「異本」によると自記している部分を抜き出すと、

① 尊号真像異本ニ銘文トアリ 一卷

② 報恩講式三段○異本私記ト有 一卷 当流先徳御作

③ 浄土法門見聞鈔異本ニ集トモアリ 一卷

④ 嘆徳式文謝トモアリ 一卷

異本ニハ文ノ字ナシ

以上の四ヶ所であるが、他の部分でも校合が行われた形跡が数点見られるのである。

所が、寂玄が校合に用いた異本が、何によってであるのかが分からない。しかも一雄真筆本あるいは、その正確な書写本でもないことは、異本の校合によってでも真筆本に復元されていないことから分かる。よって、寂玄が校合に用いた異本は、一雄真筆本とは別本の『真宗正依典籍集』書写本であったと見るべきであろう。そういうことであるならば、『真宗正依典籍集』は、一雄真筆本と寂玄書写本の元本と校合本（異本）との三本が存在することになる。（今、寂玄の『典籍集 全』を含め

ば四本あることになる。そのうち元本と校合本の二本が不明である。

所で、この寂玄の『典籍集 全』には、いままでの聖教目録には例をみない特色がある。それは、『教行信証』・『愚禿鈔』をはじめ十四部の聖教類に、左註の添書きとしてその聖教の撰述年時が記載されていることである。これは、聖教目録編纂史の上からも一六〇〇年代のものとしては、非常に珍しいものと言えよう。それ以前までは、聖教の書名の下に撰述者名とその略歴などが記載されたり、所望者があればその名が記されているだけであった。しかし撰述年時が記載された聖教目録は、この寂玄の『典籍集 全』が初めてであると言える。それが、一七〇〇年代に入ると、円照寺の性海慈空（知空の弟。一六四四～一七二七、八十四歳没）の『高宮聖教目録』一卷や、西福寺の光遠院惠空（一六四四～一七二二、七十四歳没）の『仮名聖教目録』一卷などには、聖教類の撰述年時の記載が出現してきて、珍らしくもなく当然のごとくになっていくが、寂玄が撰述した一六七九年頃には、全く新しい試みであったと言いうことができるであろう。

この寂玄の『典籍集 全』は、内容的や構成など全体的には、一雄の『真宗正依典籍集』の流れを汲くもので、『浄典目録』の分類上からは、「存覚『浄典目録』一雄系統本」の一つと言いうことができる。しかし上述の相違点や増補などと、その細部に及んで検討をさし挟むならば、いささか本来の一雄聖教目録とは趣きを異にしたものであると窺われてくるのである。

第十節 小結

以上、浄土真宗の聖教目録の編纂史を、法然上人より（蓮位）・存覚師・綱蔽・明了・願惠・実悟・了尊・一雄・寂玄と十人について、簡略ながら考察してきたのである。そこで、真玄の聖教目録の研究に関して、法然上人・存覚師・一雄の三師の指南を抜きにしては、考えることが出来ないということが知らされたのである。

所で、案外と聖教目録の研究は、真宗学や真宗史学からは疎んぜられる嫌いが無いではない。しかし、元来、聖教目録とは、真宗教学を伝承する聖教類の目録であり、その意味からすれば、教学上では重要な位置をしめるものである。従って、聖教選定を誤まれば、教学自体も屈折し、延いては真宗の信仰まで歪んでいくことになってしまう。

かつて、江戸中期において、宗学者たちが数多の聖教類を列挙した聖教目録を撰述したが、それは全く聖教目録が持つ教学的役割としての認識を欠如させたものである。思えば、江戸初期に、東西本願寺に学寮、学林が創建されたがそれは宗門の教学的必要性から生み出されてきたものではなく、ただ学問の興隆という当時の社会的風調のもとに出現したものであった。それ故、彼ら末学の徒たちにとっては、教学（信仰）よりも学問（解釈）を重視する傾向にあったといえる。だから、学林・学寮の中で、信仰による異安心ならともかくも、単なる学問上での異安心

事件が統発したことも、そのような背景からのことなのであろう。

また、相伝家が蒙った異義・邪執の咎は、註五 学林や学寮の学問的な聖教解釈の立場から、真宗の相伝（信仰）註六 教を見限る限り、全く理解し難きものであったに違いない。例えば、相伝家が幾度の弾圧を受けたその折々に、相伝家側に何らの弁明を許さないという、極めて狭小的な態度を取りつづけたことは、学林、学寮が学問的論争は出来ても、教学的論争が出来ないという弱点を内に持っていたせいなのかもしれない。

これら学林、学寮の誤った態度に対して、相伝家真玄は、それは、真宗教学の欠落から起ると断定して、その原因を学林、学寮で用いる聖教類の真偽の混乱にあると見抜いたのである。つまり、誤った聖教の修学は、誤った教学を作り出す。それが学林、学寮の誤謬の根源であると看破したのである。註六

それ故、真玄は、この難を除かんとして、聖教目録四巻の撰述をすることになった。

真玄は、それまでの 浄土真宗が、『浄典目録』や『真宗正依典籍集』などの聖教目録に列挙した聖教を、そのまま真宗の聖教として扱ってきた旧弊を排除するために、それら聖教類の中から、真宗相承教学の聖教は「正依」の群へ、それ以外に相承された浄土典籍は「傍依」の群へと分配し、前者を「浄土真宗正依聖教」とし、後者を「浄土真宗傍依典籍」として、聖教類を大別したのである。また同時に、その他の浄土諸師や浄土余流などの混入の聖教類は、全く聖教目録より除外させるなどして、

『相伝義書』相伝家の聖教目録について

徹底した聖教目録の簡潔化をはかったのである。

そればかりか、真玄は、真宗の教学は、必ず真宗正依の聖教によらねばならないことを明言し、更に、その正依の聖教を修学するためには、尚、宗祖以来の相承（口伝）の義に基づいて修学しなければならないことを強く論説したのである。しかも、それらは、相伝家の中で暗黙に行われていた真宗教学の修得のあり方を、この聖教目録の上で、改めて明確に打ち出したものでもある。

そして、この真玄の明解なる論述は、それ以降の相伝家の人々にとっても、大きな示唆を与えることになったに違いない。

以上の如く、『相伝義書』の一部としてある真玄の聖教目録四巻は、江戸中期において突然に世に出現したのではなく、浄土真宗の聖教目録編纂の長い歴史を経て、しかも、真宗相承教学の中より生み出されてきたものである。それは、取りも直さず、学林や学寮が陥っている聖道門的な学解中心の修学によって真宗聖教を理解しようとする立場を翻えして、浄土真宗の相承教学に叶った修学を志すようとの切なる願いに立って、初心・始学の者や末学の疑心を起こさないためのものであった。またそのこと以外には、彼の撰述の意趣はなかったものと、かく窺い知らされるのである。

後記

今回、『相伝義書』相伝家の聖教目録について」と題して、真宗の聖

教目録の編纂史を途中まで論述してきたのであるが、その聖教目録の一つ一つについて、どうも辻褄が合わなくて、筆者としては不足の感がぬぐえないのである。存覚師の『浄典目録』から始まって実悟の『聖教目録聞書』、一雄の『真宗正依典籍集』、そして寂玄の『典籍集 全』に至るまで、本来一本の糸で結ばれていても良い筈であるのに、それが途切れ／＼となっていて、辛うじて何とか一本の流れを見い出せるがごときの状態である。現在、世に知られている聖教目録のみを以ってしては、聖教目録編纂史の真宗初期より江戸中期、及び末期までの豎の系統を明らかにすることは不可能に近いであろう。なぜならば、世に知られている聖教目録は、それぞれがみな別の系統を引く写本をもとにして撰述あるいは書写されているからである。このことからして、ひたすら各所蔵本の聖教目録の（写真）公開を一つでも多くなされることを希うのみである。

また、この小論の編纂史で研究や資料の不足など、また諸般の事情により、相伝家真玄の聖教目録まで辿りつくことが出来なかつたことが心残りでもある。

註一、付録の△写真2Vと△写真3V参照。△写真2Vの掲載は、真宗寺足利佐氏の了解のもとに、堺市博物館の協力を戴き主任研究員吉原忠雄氏のお手を借りて撮影したものである。ここに各位のご高配に厚く感謝致します。また△写真3Vは、当研究所が光善寺の調査の折りに撮影したものを掲載した。

註二、実悟の『聖教目録聞書』が山上正尊氏によって以前に復刻されたが、不備な点が多々あったことから、この度、現城端別院善徳寺輪番昌河等氏のご承諾を戴き目録全部を△写真1Vとして掲載した。

註三、「已下漢朝」の後に、わくで囲って「騎驎聖財立宗論四卷不著 菩提流支造」を挙げている。また、『浄典目録』では、「註論」の次に「略論」が挙げられているが、一雄の目録では「安楽土義」の後に「讚阿弥陀仏偈一卷同造」として掲げられている。

註四、性応寺一雄師の『真宗正依典籍集』を紹介できないため、光善寺藤原暢信氏のご承諾のもとに仏乘院寂玄の書写本を△写真4Vとして掲載することにした。

註五、相伝家及び『相伝義書』については、同朋学園佛教文化研究所紀要第七、八合併号の「相伝義書の系譜」と第九号の「相伝義書の巻物」の拙稿を参照されたし。

註六、『常願師隨筆』真玄筆
「浄土真宗の門弟、東西をわかぬ古今みな自己の執情につながられて、祖師別異の相伝にまよふこと、もと名利の心底に住して、仏法に志のうすきがいたすところなり。当今の覚悟まぢ／＼にして、一味の安心に住することまれなるにてしるべし。是の如くなりきたる根元あり。

まづ、西派にては、承応年中に永照寺、西吟聖道の学解のみにして祖師一流の宗致にうとき仁を能化となし給て宗義を談ずるより、西山鎮西の末疏等を本拠として、上下ともに三部妙典の文字よみよりはじめ、経の文字訓声、自余とかはりあり、七祖の釈義、文字よみ等、口授あるをもて矩模とす。前代は本山の堂僧をめしか／＼へらるる時節も、第一にその吟

味ありてその口授のたしかなるをもて、本とせられたること伝え聞くも
の也。当今は、その沙汰だにもなきことなり。大坊主分の人々にも先祖
御当家の伝を受けし点本を所持して自分自分の字ちからにて、これをよ
み義とり祖師の相承にそむく輩らのみなり。是の如くなりきたるゆへに、
当宗御建立の基本、教行信証六巻の御書も僅におさめ所持する輩らもあ
りといへども、年々を経ても拝見するといふこともなく、もとより義意
の別途をもうかがふといふこともなくすぎゆく風情、冥加のほどを恐る
可し、悲しむ可し。(乃至)

東派にても、誓源寺円智寛文中、能化に仰せつけられけり。これも
無相伝の坊主ゆへ、当流の義を談ずるにやうやく西山義を祖師の御已証
ととりまぎれ、所化を誘引するゆへに、西派同然のありさまとなりきた
れり。これによりて東派にても真実の法義を談ずるを秘事、くせ法門と
こゝろえて、祖師一流の真実をきらふ人のみになれり。末の世とはなる
といへども、祖師の御已証をかへりみず、無相伝のあやまりをしらざる
こと、歎きても、なげくべきはこの一事なり。しかしより、このかた東
西ともに聖人の御已証は、智恵学解にかくれ、自余の念仏宗の意気にお
しなみて、なれるありさまなり。」

類聚傳一卷 念佛鏡二卷
 往生西方略傳三卷 往生淨土略傳
 淨土齋珠集四卷 龍舒增修淨土
 帝王年代録一卷 續高僧傳一
 大宋高僧傳二卷 日本住持傳記
 續本朝住持傳二卷 檢遺住持傳
 復拾遺住持傳三卷 三外住持傳
 本朝新住持傳一卷 金蓮住持傳
 本朝新住持傳一卷 今選住持傳
 上六家十一卷号
 讚阿彌陀佛偈一卷 西方要記一卷
 五天竺住持傳一卷
 往生要集 往生拾目 三界記

悲母勸進偈一卷 太子傳
 選擇集二卷 三部經講釋
 教行信證言傳各一卷 愚木丸鈔二卷
 淨土支類聚鈔一卷 旃陀羅義集
 六要鈔十卷 總解記一卷
 法華問答一卷 愚鑿抄
 善光寺架傳 讀經口傳明鏡集
 大原問答一卷 此般問答一卷
 一向專修七箇條問答一卷
 報恩誦私記 實德文假名一卷
 信貴鎮守講私記一卷 兩師講私記
 御恩誦私記一卷 謝德誦私記
 入出二門偈頌一卷 正信偈誦
 四十八願同願成就文一卷 本尊也

略顯當宗一卷 三部經講釋
 諸經要文集 論文釋文
 真宗念佛問要抄一卷
 富樓那抄 五卷
 偈卷忘教分
 選擇集註解五卷 拾遺百傳
 語燈錄 惠宿都傳
 步伽鈔二卷 阿彌陀經開書
 女人往生集一卷 秘傳抄
 正源明義抄九卷 念佛大意一卷
 念佛緣起一卷 往生大要抄一卷
 西方指南抄 空上人御消息
 口傳抄三卷 末燈鈔
 聖人傳繪詞二卷 唯信鈔

改邪鈔 一卷 安心定意鈔本末
 唯信抄文意 一卷 願人鈔
 本願抄 一卷 願名抄
 顯地獄抄上下本末 二卷 真宗意得抄一卷
 執持鈔 一卷 持名抄 二卷
 洋土真宗抄本末 二卷 真宗明父抄本末
 諸神木懷集 二卷 破邪顯心抄本末

肝要記 一卷 女人性要聞書一卷
 洋土見聞集 一卷 洋土見聞集二
 教化集本末 一卷 洋土文類集一
 歎異抄 一卷 寂要抄 二卷
 志歸函鈔 一卷 法語一帖
 教行信證名義 一卷 真宗血脈抄本末
 難辨分別抄 一卷 真宗傳來鈔本末

勸化大旨 一卷 真宗用意本末
 十重裁斷 一卷 洋土法門見聞集
 辨述存射鈔 一卷 一念多念證文不
 一念多念文意 一卷 獲世物語聞書本末
 略論安樂淨土義 一卷 持心記 一卷
 史知鈔 一卷 正信偈大意 一卷
 聖人血脈文集 一卷 聖人樹消息集本末

洋土三經往生文類 一卷 唯信鈔議 一卷
 創林抄 一卷 自要集本末 一卷
 報恩記 二卷 十四行偈聞書本末
 正信偈略註 一卷 四十八願義本末
 尊號真佛偈文 一卷 念佛者起問本末
 現世利益和讚註本末 洋土真宗抄聞書
 念佛往生義 一卷 自力他力分別書本末

三部經尺 一卷 陳狀本末 二卷
 正信偈註解 一卷 三機性意本末
 洋土大意 一卷 四十八願本末 二卷
 行者大意抄 一卷 漸誘釋本末 一卷
 念佛得去義 一卷 久見聞集本末 一卷
 世外要記 一卷 嘆德文意 一卷
 顯天上抄 一卷 末燈燈明記抄本末 一卷

慈信不考樹書 唯信鈔說宣文
 專修念佛問答抄 寂須敬重繪言
 正信偈詳人 六八鈔
 洋土真宗問卷 念佛大意本末
 濁見集 西信覽問申抄本末
 相承血脈事 洋土宗若本末 二卷
 要義深秘懷中書 三事錄 一卷

洋生真宗見聞集一 真宗所撰
 洋生真宗聞書二 一念多念分別事
 念佛行者用心事一 念佛行人狀一
 本願因果鈔一 因果鈔一
 登山狀一 二 本願相應集一
 善道和尚金剛法師宗論事一
 名号不思議權願不思議問答一

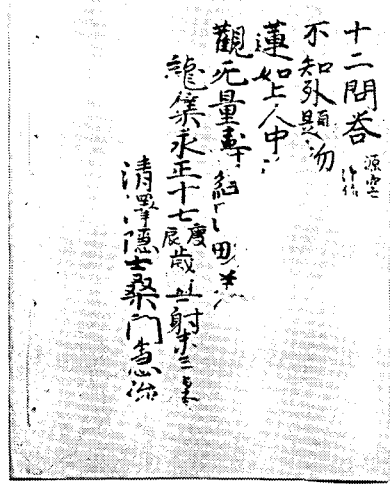
親鸞寫聖人御因縁并 真佛源海事一
 空聖人七箇條御消息一 卷
 法然聖人法後二箇條起請文真因
 稱名念佛奇特聞書抄 一 帖
 本乘百法論名教圖 一
 存贊上人一期記在信樂寺本 一 卷
 佛道修行教文一 聖道洋名目一

還相迎向聞書一 女人往生事一
 西方發心集二 曼陀羅經物一
 秘傳六帖疏六 聖德太子御聖
 聖德太子會指示 聖覺要言一
 彼岸詠一 他力信心聞書一
 太子讚嘆表白一 父子相迎一
 無常詠記一 釋尊御傳記一

勸化大要抄一 勸化大要抄一
 和釋本願抄一 密大要抄一
 鞞中吟聖覺作 本願成就聞一
 四十八願本 神祇本
 六字名号口傳一 盤
 神本地一 飯命
 和讚註 念佛心

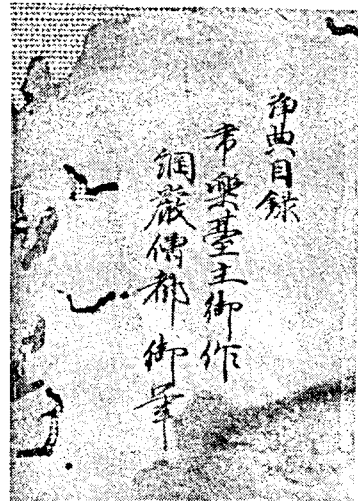
教化集六通事 一 三
 洋穢三令別抄一 二
 親聖人御語御詠 一 若
 御供用抄一 源一聖人親即
 巨葉御詠一 同朋惡口消息抄
 四十八願抄教抄 勸化言用但語
 顯正流義抄本 洋賢寺申狀一

一年二季彼岸事一 念佛往生義
 血脉往生集一 淨土宗略
 洋曲目錄一 四十八願
 五念門聞書
 於當流十三
 行基法語
 法然聖人法語



〈写真 2〉

〈写真 3〉



内表紙

堺真宗寺所藏(堺市博物館協力)
綱藏傳都御筆淨典目錄(部分)

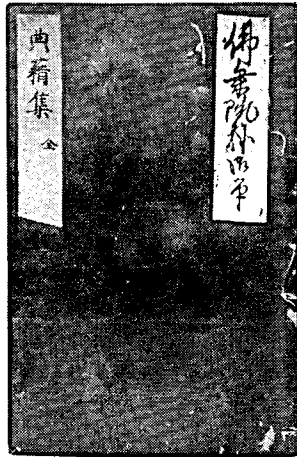


外表紙

枚方光善寺所藏
達玄書写本淨典目錄(部分)

枚方光善寺所藏
寂玄常顯典籍集全

〈写真4〉



真宗依幽箱集

大元量壽經 二卷 康僧鎧譯
觀无量壽經 羅良耶含譯
阿彌陀經 八卷 羅什三藏譯
淨土論 人撰定 菩提流支譯
已上天竺說

是淨土宗正依三經一論也

已下漢朝

論註 上下二卷 曇鸞和尚造
安樂土義 一卷 同造
讚阿彌陀佛偈 一卷 同造
安樂集 上下二卷 道綽律師造
觀經戒 四卷 善觀大師造
法華讚 一卷 同造
仗生札讚 一卷 同造
觀念法門 一卷 同造
般舟讚 一卷 同造

上宗家大師依五部入心し立書九部し皆善見
本古且日宗四部上宗し其書し入佛傳而分す

群疑論 二卷	懷感律師造
瑞應刪傳 一卷	本指雲人神記受子
已上淨土宗五種抄也	少康法師造
念佛鏡 二卷	海州興法寺子後尊
五會調 一卷	法照律師作
淨土論 二卷	也 不作
大經疏 十卷	淨觀寺惠遠
同疏 十卷	嘉祥寺吉藏
同疏 十卷	懷輿造
同疏 十卷	戒勞撰
同疏 十卷	法位撰

同疏 二卷	法驗撰
觀經疏 一卷	淨觀
同疏 一卷	嘉祥
同疏 一卷	天台大師
同疏 一卷	法聰
同疏 一卷	法常
同疏 一卷	靈芝 七照律師
正觀記 十卷	戒度律師 惠遠
弥勒經義疏 一卷	元照律師
問持記 一卷	戒度 元照大師
同疏 一卷	孤山智圓
同經通讚 一卷	慈恩大師

苞舒淨土文 二卷	元休
樂邦文類 六卷	石宗院
已上唐土	
已下和朝	
往生要集 十卷	源信僧都作
法生十目 一卷	永觀律師造
選擇集 一卷	愚谷上人作
三部經講尺 一卷	同仰作
教行信證文類 十卷	淨土宗聚鈔
淨土文類聚鈔 一卷	
愚充鈔 十卷	正木和尚實介
入西門傳 一卷	

<p>和讃 二卷</p> <p>尊号真像 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>一念多念證文 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>三經往來文類 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>唯信鈔文意 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>專於念佛向谷鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p>	<p>柳消息集 一卷</p> <p>末燈鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>具宗行義鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>報恩講式三段 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>本願寺聖人傳繪 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>拾遺古德傳 九卷 <small>具宗上人</small></p>
---	---

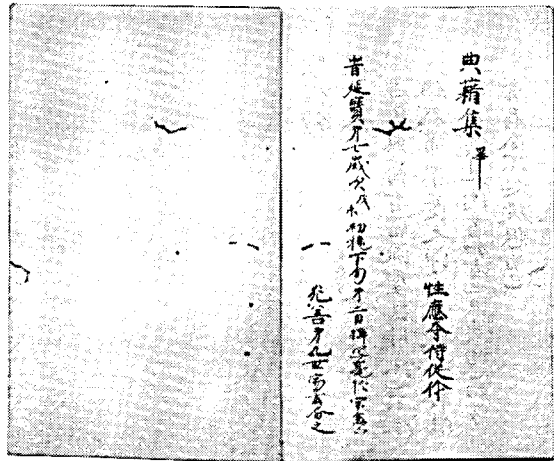
<p>歎異鈔 一卷</p> <p>本願鈔 一卷</p> <p>口傳鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>安心定意鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>執持鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>願心鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p>	<p>最要鈔 一卷</p> <p>改邪鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>真宗遺傳鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>還相廻向問書 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>真宗用意 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>淨土文類集 一卷 <small>具宗上人</small></p>
---	---

<p>肝要記 一卷</p> <p>淨土法門見因鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>真宗血脉傳承鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>法花念佛同修異名事 尊師和讃鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>觀化大旨 一卷 <small>具宗上人</small></p>	<p>因果鈔 一卷</p> <p>已上當流先德覺如上人御作也</p> <p>六要鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>嘆德式文 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>日文意 一卷 <small>具宗上人</small></p> <p>持名鈔 一卷 <small>具宗上人</small></p>
--	---

淨土真要鈔 二卷 <small>月外卷</small>	淨土見聞書 二卷 <small>月外卷</small>
諸神本集 二卷 <small>月外卷</small>	五源名我集 二卷 <small>月外卷</small>
破邪見正申狀 二卷 <small>月外卷</small>	廣末 二卷 <small>月外卷</small>
石田新九怕下号、蓋是系家五部九卷 <small>模、石田新九</small>	正信傳閉書 二卷 <small>月外卷</small>
希述名体鈔 二卷 <small>月外卷</small>	一期記 二卷 <small>月外卷</small>
女人住生閉書 二卷 <small>月外卷</small>	淨土典名鈔 二卷 <small>月外卷</small>
顯名鈔 二卷 <small>月外卷</small>	
歩帆抄 二卷 <small>月外卷</small>	
没智鈔 二卷 <small>月外卷</small>	
報恩記 二卷 <small>月外卷</small>	
選擇法解鈔 二卷 <small>月外卷</small>	

統解記 二卷 <small>月外卷</small>	淨土見聞書 二卷 <small>月外卷</small>
法苑問答 二卷 <small>月外卷</small>	五源名我集 二卷 <small>月外卷</small>
法語 二卷 <small>月外卷</small>	廣末 二卷 <small>月外卷</small>
至道鈔 二卷 <small>月外卷</small>	正信傳閉書 二卷 <small>月外卷</small>
淨土宗名目 二卷 <small>月外卷</small>	一期記 二卷 <small>月外卷</small>
聖道淨土名目 二卷 <small>月外卷</small>	淨土典名鈔 二卷 <small>月外卷</small>
報恩講 二卷 <small>月外卷</small>	
嘆徳文 二卷 <small>月外卷</small>	
本願鈔 二卷 <small>月外卷</small>	

三三信同事 二卷 <small>月外卷</small>	唯信鈔 二卷 <small>月外卷</small>
暮殿繪 二卷 <small>月外卷</small>	一念多念 二卷 <small>月外卷</small>
正信傳又意 二卷 <small>月外卷</small>	石斯典藉音當流聖教目錄也不殘 編入常樂堂之淨典目錄且又聆觸 耳目隨見聞書加看也只是初心始字 者為公不起疑想而已
御文 二卷 <small>月外卷</small>	
叔須敬里繪 二卷 <small>月外卷</small>	
	聖寬律師作 陸寬律師作



「相伝義書」相伝家の聖教目録について

